

コミュニティ

The Community

79

町内会

コ ミ ュ ニ テ イ

The Community

79

町 内 会

財団法人 地域社会研究所

1987

さまざまな町会活動

楽しいかまくら（秋田県横手市）



いろり端で集会（島根県津和野町）



みんなで歩け歩け（東京都板橋区）



区民運動会（滋賀県高月町）



防災訓練（福島県福島市）



クリスマス忘年会（島根県川本町）



（あしたの日本を創る協会発行「まち・むら」より転載）

発刊のことば

(創刊号から)

人間は、ひとりでは生きてゆかれない。つねに多数の他人とともに、助け合って生きてゆく。その生活、職業、学問、趣味などにおいて、なにごとによらず志を同じくする人間の集団はこれをコミュニティと呼ぶ。人間は今日まで、あらゆる工夫を凝らして、いろいろな形のコミュニティをつくって、その中に生きてきた。これからさきも、人間のあるかぎりその努力はつづけられるであろう。

日本人もまた、古来いろいろなタイプの集団生活を経験してきた。しかし、その大部分は、封建的な社会制度を土台としたコミュニティであって、個々の自由な人間を平等に扱ったものではなかった。さいきん新しい日本になって、初めて民主的なコミュニティを形成すべき責任を負ったわけであるが、まだ、旧来の慣習と惰性にも力強いものが残っているし、新しい観念もいまだしの感が強い。

そのために、形のうえにおいて民主的社会となったわが国も、その実においては、いまだ空虚な状態であるといわざるをえない。いかにして良い民主的なコミュニティをつくるかということこそ、今日、日本人が直面している緊急課題である。

財団法人地域社会研究所は、この問題と取り組む目的で創立されたのであるが、国民全般にコミュニティの観念とその意欲がはなはだ薄いことが、もっとも基本的な問題であることに着目して、まず活動の第一歩として、平易で通俗的な叢書の刊行を計画した次第である。

叢書の名称を「コミュニティ」と定め、今後、各分野にわたる基礎的な知識の普及を目指して、つぎつぎとこれを取り上げて刊行をつづける予定であるが、われわれの念願のごとく、この叢書が広く国民の間に多少なりともコミュニティの概念を植えつけていくことに役だつならば、誠に本懐の至りである。

昭和39年(1964)春

財団法人 地域社会研究所
理事長 矢野 一郎

目 次

第1部／報告

町内会と日本の地域社会	倉沢 進	1
1. 文化としての町内会		1
2. 津山・火事・町内		7
3. 町内会の組織的側面		18
4. 町内会と地域の自治		21
5. イギリスの住民活動		30
6. 町内会の文化変動		37

第2部／座談会

町内会を考える		48
---------	--	----

出席者 倉沢 進 加太 こうじ
越智 昇 日下部禧代子
司 会 青井 和夫

はじめに		49
1. メインリポートの要約		50
「町内」の活動機関が「町内会」だ		51
町内会は世帯主をメンバーとする自動加入の自治的な単位だ		52
昔の「町内」は全員加入の集団ではなかった。それが全員加入となり、行政補完的なものに変質したのだ		52
町内会の存在は日本文化の特徴の一つか？		53

町内会のプラスの点	54
町内会のマイナスの点	55
町内会と自発的結社との競争的共存が不可欠	56
清水市の「飯田をたがやす会」	56
2. 町内会の過去をふり返る	57
江戸時代はどうだったのか？	57
上意下達の機関としての自警団	58
もちろん地域差はあった	59
町内会と関東大震災の関係	59
上意下達と住民自治の関係	60
自警団は警察がつくらせたもの	61
物資配給と国債割り当て	62
村から町への変貌過程——横浜の例	63
自衛組織としての衛生組合	64
戦後の占領軍の禁止令	65
戦後の生活危機と町内会	66
3. イギリスに町内会はない	67
ドーア教授の『都市の日本人』	67
町内会のような行政下請け組織はない	68
教会の意味が大きい	69
任意加入を尊ぶイギリス人	69
日本でもお宮とお寺は非常にちがう	70
地域に弱かった日本人も変わりつつある	71
多民族国家オーストラリアでは？	73
日英比較——実にさまざまなクラブがある	74
クラブに入るきっかけは何か？	75

クラブの中心は中産階層か？	77
労働者階層のクラブの例	77
人皆ちがうという哲学	79
4. 日本とアジア諸国の比較も必要	80
実利的・政治的・宗教的な要因の入りまじっている日本	80
中国や台湾の町内会はどうか？ フィリピンのバランガイは？	81
東アジアから東南アジアにかけての共通性	82
家制度の影響は？	83
5. 町内会とボランティア・アソシエーション	
とを組み合わす——さまざまな提言	85
ボランティア・アソシエーションの発生契機	86
コミュニティ形成活動の手だて——自己充実型活動からはじめる	87
地域混住型の日本，地域住み分け型の欧米	89
グッド・ネイバーの精神	90
小学校時代からコミュニティ・サービスの体験を	91
福祉サービスの場合にも立案・決定・実施への全面参加を	92
日本では地域ボランティア活動に男性の参加が少ない	93
町内会は警察と神社と地域ボスから手を切り，実利を伴う仕事をやれ	94
女性も地域活動に進出しはじめたが	94
行政は勝手な線引きをするな。また町内会にも適正規模がある	95
コミュニティづくりの一事例	97
付 録	
ある町会役員員の記録から	100

町内会と日本の地域社会

倉 沢 進

(東京都立大学教授)

1. 文化としての町内会

日本のどの市町村に行っても、町内会あるいは町会、あるいは自治会、あるいは区会、あるいは部落会という——以前は、総称して「部落会、町内会」といっていたのですが、最近では「町内会、自治会」というふうにいわれています——名前の住民の自治組織があります。自治省が最近調べたデータでは、こういう組織をもたない市町村は全国に七つしかないということになります。ですから、日本のほとんどの市町村に、町内会の形の住民自治組織が組織されていることになります。その町内会、自治会は、その地域の住民の9割以上をどこでも組織しているということになりますから、日本の全国のほとんど全部の地域で、ほとんどの人々が町内会、自治会に加入をしているということになります。

話は少し古いことですが、昭和初期に、東京市政調査会という団体、これは、後藤新平さんが、震災後、日本の都市問題の研究のためにつくられた組織であります。ところが、ニューヨークの市政調査会に「欧米にも同じような種類の地域団体があるか」という問い合わせをしました。ニューヨークの市政調査会理事のギューリック博士の回答が残されておりますが、「現代、余の知る限りにおいては、ヨーロッパ及びアメリカにおいて、かかる機能を有する団体なし。ヨーロッパ諸国においては、官公庁の事務に属すべきものを私的団体に委任することは、これを避くる方針に漸次向

かいつつあり、かくのごとき団体の日本に存在することは、日本がなお封建制度の余えいを残存せるがためにあらざるや」というものです。

これは、時代の背景としては、日本が戦時中に銃後の体制を固めるというようなことで町内会を組織しようとしていた、その参考にしようとしたということであつたと思います。したがって、現在とはまったく状況が違いますが、欧米の社会にこのようなものがなくて、日本の社会には必ずあって……ということが、日本の社会のいわば文化の特徴を示すものではないかという議論があります。必ずあって、といて少し言いよんだのですが、昭和22年ごろ、マッカーサー司令部が、町内会、部落会は日本の戦争遂行の協力組織であつたという理由で、禁止の指令をしております。当時のマッカーサー——日本でかつてこれほど強力な権力を誇った人はいなかったのですが——の指令によって一応廃止されたにもかかわらず、事実上、草の根に生きながらえて、独立とともにまた登場してきた。こういう団体が、しかも今日、日本全国のほとんどの地域で、ほとんどの住民を組織しているということは、日本の社会の非常に大きな特色だろうということになるわけで、したがって、これが日本の文化の一つの型を代表するのではないかという議論を、数年前に亡くなられた近江哲男さんが始められました。私も、基本的にはこの考えが正しいだろうと思っております。

ヨタ話をすると、中国生まれのアメリカの社会学者のシューという人が、『CLAN, CASTE, CLUB(クラン、カースト、クラブ)』という本を書きました。中国の社会は、クランつまり宗族というか、親・同族的な組織を基礎にして初めて理解できる社会ではないか、それが社会の骨格をつくっているのではないか。インドの社会は、カーストと呼ばれる一種の身分制度——身分、信仰、職業、地域、人種と、いろいろなものが複合的に重なり合った単位ですが、これを知らないとインドの社会はわからない。そしてアメリカの社会は、何かしようとすれば、必ず「クラブ」と呼ばれるような集団がつくられて、それがいろいろな活動の単位になる。し

たがって、この三つが、中国とインドとアメリカの社会の骨格をなしている象徴的な集団であるということをいいました。

このシューさんが、もし四つ目に日本の社会を取り上げたら何というだろうかと考えたことがありまして、「町内会」とするのが正しいのではないだろうかと思っているわけです。ところがシューさんは日本にいられて、日本の社会の基礎をなしているのは「家元制度」ではないかといっておられます。新しい本を書かれたわけではなくて、たしか新訂版か何かに「家元」という章を追加されて、日本の社会の場合は家元ではないかということを入れました。じつは、もとの本は、『CLAN, CASTE, CLUB』つまり、頭が全部「C」という韻を踏んでいる。そういうことから考えると、日本の社会も、当然「町内会」でなければ平仄が狂うということになるわけですが、シューさんが日本でお会いになった社会学者が適当でなかったのではないかと、私はひそかに思っております。

それはともかくとして、そのような意味で、日本の文化、あるいは日本の社会の根底を形づくっている非常に大事な集団であるということがいえるだろうと思います。しかし、この集団については、毀誉褒貶といえますか、評価が大きく振れるのも事実であります。先ほど紹介したギュリック博士の意見以来、日本の社会学者は、町内会、自治会というもの、きわめて封建的な、あるいは非常に古い伝統的な、そして、やがて近代化の進行とともに消滅するはずの組織である、こういう見方をとってきました。それから、中年以上の人の記憶に新しいところであり、マッカーサーが禁止した原因になったことでもありますが、防空演習とか、スパイを調べるとか——まあ、スパイなんていうところまではいかなかったわけですが——自由を拘束し、そして、戦争目的のために人々を引っ張っていく組織として働いた。もちろんその中身は、個人的には、特定の町内会長さんがはなはだ頑迷な方であったとか、そういうことが非常に影響しているかもしれませんが、少なくとも、町内会という名前を聞くと拒絶反応を起こ

すという人たちが、都市部を中心に多いことも事実です。

一方では、町内会、自治会があって、初めて地域社会のさまざまな問題処理ができるのであるし、また、地方自治体が業務を遂行していく上で、この団体がなくてはならないのだ——こういうふうに考える人たちもおります。非常に長い時間にわたって、全国至るところで、さまざまな活動を展開してきたわけですから、毀誉褒貶まちまちになるのは当然のことだと思いますが、ただ、町内会というのは歴史的にいろいろな変遷を経て今日の状態があります。したがって、多くの人々は、その町内会の、ある一面を取り上げて、いいとか悪いとか、好きだとか嫌いだとかいうことを判断してしまいがちです。もう少し全体として、本来、町内会というものはどういうものであったのかということを考えておく必要があるだろうと思います。

先ほど述べた自治省の最近の調査でも——どこでやった調査でも、結果はほぼ変わらないわけですが——町内会、自治会がやっている活動の中に、一つは集会所の維持・管理というのがあります。これは、9割ぐらいの団体がやっていますが、清掃美化、盆踊り、お祭り、運動会、旅行といったような行事、募金とか献血への協力、街路灯・防犯灯の設置、防災・防火、文化・スポーツ活動、敬老会、成人式、子供会といったような、年齢集団に対応した諸活動、行政との連絡——これまた九十何パーセントという高い割合です——それから、連絡の中に入るのかもしれませんが、行政に対して、要望とか陳情をする、こういったような活動をしております。学者たちは、このことを「包括的な集団」つまり、目的が非常に包括的である、何でもやる、そういう集団の特徴をもっているというふうにとらえているわけです。先ほどの、封建的あるいは伝統的な、といったときの一つの論拠になることですが、あらゆる活動をやっている集団というのは、たとえば第一生命という会社は、生命保険料を集めて、それを運用して……という一つの限定された目的をもった団体であります、それに対

して町内会という団体は、いま挙げたようなさまざまな行事や作業をや
って、もっと広くいえば、地域住民の親睦と、地域社会の向上のため、とい
ったような、非常に包括的な目的で活動をしているということが一つの特
徴をなしていると思います。

9割以上の人が入っている団体というのは非常に例外的であると思いま
す。もしそれが自発的に参加する任意加入の団体であるとしみますと、国民
の9割以上が入っている団体というのは、ほかにはありません。町内会の
全国組織というべきものがないものですから、そういう数字は出てきませ
んが、町内会日本国連合というものを仮につくったとしますと、これだけ
大きい組織はほかにはない。総評が逆立ちしても、どこが頑張っても、と
ても追いつかないということになると思います。

ところで、加入の仕方が任意加入というたてまえであるにかかわらず、
ほとんどの人が入っている。このことのとらえ方は学者によってもいろい
ろですが、強制加入で、これが一つの封建的な性質のあらわれだというふ
うな理解をする人もあります。私は、どちらかといえば自動的に加入する
というふうに考えたほうがいいだろうと思います。たとえば、私の家は白
山4丁目というところですが、ある方が白山4丁目に引っ越してこられた
ら、翌日からこの町内会の会員ですから、会費を払ってください、ごみ
はここに出すことになっています、というふうにいってくる。いいに来た
人も、いわれた人も、自分は町内会に加入をするのだとか、その選択を迫
られているなどは考えていない。ここに住んだのだから当然だと、みん
なが考える。そういう意味では、自動加入というふうに考えたほうがいい
と思いますが、強制的とか半強制的というところに問題点を見出だされ
る方もあります。

もっと基礎的には、加入するかしないかはだれが決めるのか、だれが会
員なのかという問題です。名簿をつくと、普通は世帯主の名前が出ま
す。しかし、それは世帯主個人が加入したのではなくて、世帯が加入した

ということになる。つまり、加入単位が個人ではなくて世帯と呼ばれる集団であって、ある地域に住めば、自動的に加入して、その地域住民にかかわるあらゆる活動にかかわる。そこに、町内会というものの現状での非常に大きな特色があると思います。

もう一つ、町内会が日本の保守的な政治支配と申しますか、戦後ずっと保守党の政権が続いてきているわけですが、それを支えている選挙基盤になっているということに注目される方もあります。ただしこの点は、すべての町内会、自治会に共通している特徴ではありません。政治にかかわらないようにしているの也有りますし、たとえば、一時期全国にかなりあった革新市政と呼ばれるものの支持基盤が町内会であった場合もあります。したがって、これを町内会の基本的な性質としてとらえるということには私は疑問をもっておりますが、とにかく、いま挙げたような三つないし四つの事柄が、町内会と呼ばれる集団の組織上の特徴であります。

この特徴は、歴史的に形成されてきた特徴である部分と、本来的な特徴である部分とが混じっているように思うのです。たとえば、本来的な特徴の一つであるかのごとくいわれている全戸加入という原則は、じつは、むしろ戦時中に形成された特徴で、非常に歴史的な変化を経た部分だと思えます。

いま挙げた三つないし四つの事柄は、多くの専門家の方が指摘されるころですが、私は、もう一つ取り上げておきたいことがあります。それは、ごく自明のことだとされて、だれもが町内会の特色としてお挙げになっていない点であります。一つの地域には一つの町内会しかないということ。これはあたりまえのこととなっているわけですが、これは、ほかの集団と比べてときの非常に大きな、しかも町内会の性質を解くかぎになる点ではないかと思えます。その点は後に詳しく触れてみたいと思えますが、現在、日本中で、一つの地域に二つの町内会が競争的に存在している例は皆無に近いはずで、愛知県に参りましたときに、ある地域にそれが

ある、新住民だけが一つの町内会をつくって、同じ地区に住んでいる旧住民はまた別の町内会をつくっているという例があると聞きました。どのように運営されているのか一度見に行きたいと思って果たしておりませんが、全国的にはまず例外的にしか存在しないだろうと思います。

2. 津山・火事・町内

現状の概要を述べましたが、本来、町内会というものがどういうものであったのかということを考えようと思つくと、現在、東京のような大都市で行われている町内会がやっている活動からそれを理解するということは非常にむずかしいと思います。私はかつて、この地域社会研究所のお世話で、岡山県の津山という町を調べたことがあります。そこで、象徴的なあるべきごとに出会ったので、その話をしてみたいと思います。

私どもは津山に調査に行くときには、いつも「お多福」という旅館に泊まる習慣でした。ある日の夕方、そこに着くと、何かいつもと違ってザワザワしている。玄関に一升びんがわあっと積まれている。いつも通される部屋でない部屋に通されて、今夜は食事ができないからどこかに行って食事をしてきてくれということをいわれた。私どもは反対側から入ってきたので気がつかなかったのですが、よくよく見たら、お隣まで火事の火が及んでいて、私どもが泊まるはずの部屋も水をかぶったりして泊まれないし、食事もできないという状況であったわけです。この日の明け方に火事が起きて、近所の家7～8軒が焼けて、津山の町としては珍しい大火であったのです。この日、夕方の津山朝日新聞——これは、津山を中心とした一帯だけで読まれているもので、東京の朝日新聞とは関係のない、非常にユニークなローカルペーパーですが——の火事の記事を読んでいて、私は非常に不思議な気持ちに襲われました。岡山県の県紙とされている山陽新聞とか、朝日とか毎日とかいう全国紙と、同じ火事の記事を読み比べてみますと、決定的に違うことが書かれているわけです。もちろん、火事がど

ここで起きて、どんな被害があったかということは同じです。全国紙や県紙は東京の火事の記事と同じで、どこそで火事があって、何軒焼けて、被害がどのくらいで、火災の原因は何でと、それでおしまいです。津山朝日が書いていた記事というのは、この火事が、新開地という町内から出火して、隣の二階町という町内に燃え広がったということに大きなポイントを置いていました。それから、新開地と二階町との境は、本来は津山城の外堀であった由緒のある堀ですが、現在ではみすぼらしい溝になっております。出火した火元は木材屋さんで、材木をその溝の上に渡すかっこうで材木置き場にしており、これは不法な水面の使用であるから取り除くようにという市役所の注意が出ていた。津山朝日の論点の第2はそこでした。新開地から火事を出して二階町に広がったこと。しかも、その点については、二つの町内をまたぐ堀の上に材木が積んであったことが原因で燃え広がったというわけで、これは重大な過失といえますか、それがあって燃え広がった、二重の意味で、新開地から二階町に迷惑をかけたことが重大である——こういう記事でした。同じ新聞の広告欄には、ローカルペーパーとしては手回しがいいと思って私は感心しましたが、「出火お見舞い御礼」の広告で一面が埋まっていました。そしてその中に非常に厳密に区分されていて、出火をした新開地のお詫びのごあいさつ、類焼を受けた二階町のごあいさつといったようなものが、それぞれの立場を明確に区別して載っておりました。私は、この火事に大変興味をもちまして、この火事の前後の処置がどのようになされたのかということ調べてみて、いくらか町内会というものがわかったような気分になったわけです。

それはどういうことかという、具体的な事柄からいえば、火が発生したときに人々は何をしたか……。若い者は、飛び込んでいって、消火はちょっと無理だったのですが、二階の人を助け出すとか、家財道具を運び出すとかやっている。これはあたりまえの話かと思えます。それから、町内の主だった人たちはまず何をしたかということ、まだ火が燃えているうち

から机を用意して、出火お見舞いに駆けつける人たちの名刺を受け取ったり、ごあいさつを受けたりという仕事を始めました。それから、町内の“おなごしゅ”と呼ばれるご婦人方は炊き出しをして、握り飯をつくることを始めました。大事だと考えられていることは、一つは、町内が単位となって火事を消す。これは人情でもあるということになると思いますが、ただ、それが役割分担が非常にはっきりしていて組織化されているということが一つの驚きですし、火事が起きたとき、お見舞いに人々が駆けつけるのは、火災を受けた人というよりは町内会である、ということでありました。したがって、町内会としてお見舞い受けをしなければならない。私が泊まった「お多福」という旅館の入り口が一升びんで埋まっていたのは、「お多福」さんが町内会長をしていたので、じつはお見舞いに届けられた一升びんでありました。

このことは、あとの会計決算を見るともっとはっきりしてきました。町内会が火災に伴って得た収入、これは大部分がお見舞いです。現金でお見舞いを持ってこられる方、一升びんで持ってこられる方とあるわけですが、その一升びんのお酒は、もちろん若干はほかに使います。しかし、大部分は現金化されて、町内会の特別会計がそれで作られます。そして、炊き出しに要した費用とか、町内会が火災処理のために必要であったさまざまな経費の支出に充てられて、不思議なことに、新開地の町内会、二階町の町内会、いずれも火災にかかった費用は、お見舞いで得た収入とほぼとんとんでありました。つまり、町内会にみんながお見舞いになぜ駆けつけるかといえ、その火災の後始末をするのは町内会であって、その町内会が、火災という危機を突破するためにはどうしても費用が要る、それを届けるのが仕事のわけです。もちろん、お見舞いの気持ちを述べるということも大事なことには違いありませんが、もっと実質的な事柄が含まれている。つまり、火災を処理するのは町内会である、あるいは、火事を出して人に迷惑をかけて、謝らなくてはいけない主体も町内会であるというこ

とでした。

個人的なことになりますが、火元の材木屋さんは町内会長のところに行って、額を畳にすりつけて謝り、こういうことをいったそうです。自分はどこそこと、どこそくに不動産を持っている、それから銀行にどのくらいの預金がある、合わせてどのくらいになる、これを全部投げ出して、迷惑かをけた皆さんにお詫びをしたいので、町内会長にとりなしてもらいたい、と。さすが大人の知恵だと思うところは、その材木屋さんは四カ所に不動産をもっていたのだそうですが、三カ所の名前だけ挙げて、一カ所はいわなかったそうですが、町内会長さんは、そのことをあえてとがめようとはしませんでした。

それはともかくとして、町内会長はそれを受けて、二階町の町内会長にあいさつに行かなければならない。これから材木屋さんを連れてごあいさつに行きたいという電話をかけたのだそうですが、二階町の町内会長は、あなたとわたしの間だけれども、聞ける話と聞けない話がある……こういふかなり厳しい態度であったそうです。しかし、出かけていって、材木屋さんがそういう形で弁償をする、お詫びをするということを申し入れて、町内会長がそのいわば保証をするという形をとったところが、そこまでおやりになるのであれば、私も自分の町内の人たちに説明ができるでしょう、とこういうことでした。

その賠償の行方というのは、その後いろいろな問題があっっておもしろい経過をたどっていくわけですが、ここで大事なことは、そのように、いわば町内という単位が、火災について執行の責任をもつ単位として津山の町では考えられているということでした。

公式の処理だけではなくて、じつはもっと細かい処理があります。たとえば、材木屋さんの隣にあった、床屋さんが焼けてしまいました。この床屋さんは、若い二世が名古屋で修業をして帰ってきて、店もつくり直そうかと考えている矢先の火事であったので、比較的運がよかったのですが、

どうしたかといいますと、数町内離れたところの空き店舗を借りて仮営業を始めました。そこが空いているということを見せてくれたのは、町内の人ではなくて、床屋さんが所属している青年会議所のメンバーでした。そこで営業を始めたわけです。ところで、町内の人はこちらの形で彼を援助していました。それは、いままで新開地という町内には、床屋さんが二軒ありまして、町内の人、そのどちらかの床屋さんに行っていました。町内会長をしているお多福さんの家では、大旦那は一軒の床屋さん、若旦那はもう一軒の床屋さんという形で、必ず町内で散髪をやっていたわけです。その人たちが、遠くで仮営業をしている新開地の床屋さんのところへわざわざ出かけて行って散髪をする。これは公式の町内会の行動ではありませんけれども、町内というものが、火災という危機を突破するために、そして個々のメンバーが同じように突破できるように、相互扶助的に問題の処理をしていたわけです。

じつは、材木屋さんは、家財を全部投げ出しても賠償すると、火事の翌日はいったのですが、実際にはそれはとてもかなわない、かつ法律上もそういう義務はないわけですから、結局、約束した賠償をすっぽかしたので、二つの町内会間でも大変な問題になったのです。しかも、この材木屋さんは、町内に対する義理を欠いたために、町内に続けて住み、かつ営業することができなくなって、いわゆる夜逃げをしてしまうということになりました。火元ではないにしても、町内の義理を守っている人々に対しては、いまの床屋さんの例のように、町内が協力して、その人の生活が成り立つようにやっていく、こういうことが行われたわけです。

この火災の例の中に、町内会の持っているいくつかの特徴が含まれていると思います。一つは、地域の住民の相互扶助のまとまった単位であって、火災のような危機の突破を担う団体としての町内会の使命。もう一つは、その中にあるさまざまな年齢的な階層の役割分担。それを構成している人達には、町内会の役員になるような中年の年配の男性あり、さらに全

国地域婦人団体連絡協議会の最末端の組織である地区婦人会を形成していて、実際には町内の“おなごしゅ”と呼ばれて、町内で火事が起きたときには炊き出しをするという役割を担っている女性達など。火災を含めて、町内会のさまざまな階層の住民達は、発生する危機を突破するため、それぞれの役割を果たしているといえます。

単に、火事だけではなくて、これは全国どこでもかなりあるわけですが、それでも、葬式を町内が主体となってやるという習慣がありますし、経済的な危機の場合には、講——つまり念仏講とかなんとかいう宗教的な講、それから社交的な講がありますが——津山の場合には、頼母子講的な経済的な危機を突破するための講といったようなものもたくさんっております。それらを含めて、町内という組織が、単なる行政の連絡であったり、美化や清掃のためであったりというような、東京などでも行われているような活動とは少し違った、いわば一方では非日常的な危機の突破のために、一方では日常的なさまざまな問題の処理のために働いてきた組織だということがかがわれるだろうと思います。

火事のあった町内とは別の町内ですが、こういうことがありました。

商店街で、いろいろなところで一時、はやったアーケードを持っていたのですが、それが雪の重みでつぶれてしまった。つぶれてしまったアーケードのつくり直しの費用を、だれが負担するのかということで、町内で大変な問題になりました。町内会の役員、これはたいてい商店街のリーダーの人たちですが、この方々は、町内全体でこの費用を負担すべきではないかと考えられたわけです。つまり、坪井町と言う町内のアーケードであるから坪井町が負担すべきではないか、それも、この地域では会費は均一ではなくて、見立て割りとかいろいろあるわけですが、ふだんの配分の仕方負担しようではないか、という話でした。ところが、その町内には、もちろん坪井町の表通りに面した商店をやっている方と、裏に入ったところの住宅の人たちがいます。裏の住宅の人たちは、これは町内会というより

は商店街のアーケードではないか、アーケードによって利益を受けるのは商売をする人たちなのだから、商売をする人たちの負担でやるべきではないかという意見でありました。

町内の発展のために、というふうな言葉でこれまでみんながまとまってやってきたものが、商業者と住宅に住む人たちとは利害が違うのだということに人々が気がついた、考えるようになったという一種の象徴的な事件であったと思います。その結果は、町内会の中に商店部会というようなものをつくって、それで問題を処理しようというようなことになり、それが進んで、やがて坪井町の場合には、町内会と商店会とが分離するというようになったわけです。

じつは、表通りの商店が町内会をつくっているというふう考えるべきだという議論は、言い出した方々はご存じなかったはずですが、歴史的な背景をもっています。それは、江戸でもどこでもそうですが、明治以前から引き続いてきた町内のルールというのは、表通りに、三間なり五間なりの店と土地を持っている人たちの集団として、町内というものはあった。やがてその裏店に、最初は浪人者が楊枝を削って暮らしていたのかもしれませんが、のちには勤め人とか、いろいろな人たちが住むようになっていく。

しかし、この人たちは、本来、町内のメンバーでなかった。それが歴史的には正しい。ところが、戦時中に町内会の組織化ということが必要になってきた。その理由は、一方では防空演習があり、一方では配給がありました。防空演習も配給も、表通りの商店だけでやっていたのでは困る、全戸が参加してくれなければ成り立たないわけです。したがって、むしろ昭和期に入ってから、その区域内の全戸が加入して町内会をつくるという現在の常識が、そのころになって初めてできたわけです。

津山の場合、もう少し調べてみると、そのことがよくわかります。津山はご存じのような小さな城下町ですが、この城下町の中で、町内会をもと

ももっていた地域と、もっていなかった地域があります。もっていた地域は、すべて商店街、あるいは職人町、江戸時代の言い方でいえば、町人の居住地です。

もっていなかったところは、いうまでもないことですが武家屋敷町で、津山の場合には、田町という上流の武家屋敷町がいまでもいくらか残っていて、小京都などといって雑誌に取り上げられたりすることがありますが、この地域の場合を見てみますと、明治以降、秩禄を離れて、武家が没落して自分の屋敷を手放しますと、そこが細かく分割されて、最近のミニ開発のような普通の住宅地になっていく部分が虫食いのようになってきます。しかし、そこにはお祭りがなく、そして町内もなかった。

ところが、大正から昭和にかけて、武家屋敷の後継者ではなくて、新しく入ってきた人たちがふえてくると、子供たちから、なぜわれわれだけお祭りがいいのか、なぜ山車もないのか、こういう疑問が出て、われわれも町内会をつくらうではないかというような話が起きてくる。そして、戦時中の組織化の動きといったようなものも、一方ではある。こういったような背景の中で、武家屋敷町にも町内会ができ、したがって、由緒ある神社のお祭りのメンバーではないけれども、別の神社の祭礼などをやるようになっていく。こういう仕方では、本来町内会がなかった武家屋敷町にも町内会ができてくるということなのです。

東京の場合、そういう意味でいえば、下町と呼ばれる商人や職人が住んでいた地域に町内会はあって、いわゆる山の手にはなかったのが本来の姿です。東京の全域に町内会が広がってきたのは、関東大震災の後です。町内会がいつできたかということ、東京府が戦時中に調べているのですが、そのデータでは、非常に多くは、大正の末期から昭和初期につくられております。理由は、おそらくは、大震災の際に、危機を突破するために町内会の果たした役割というものの認識が広まってきて、山の手地域にも、町内会が次第にできてくるという経緯をたどったように思われます。

昭和以降になって、行政の介入による全国的な組織化が進むわけですが、発生した契機は大震災であったと考えてよろしいと思います。

そうしてみますと、じつは町内会というものが、全戸加入の日本の社会の共通の基盤になったのは戦時中以降のことで、それ以前は、むしろ商店街で行われていた習慣であったと考えたほうが正しいのではないかと思います。

その背景をさらにたどれば、もう一つの町内会の起源の部落会というものにさかのぼることになると思います。これは説くまでもないことですが、農業をやっている集落の中では、その村落の中の家々の共同が、生きていくためにどうしても必要です。それは、農業の根幹にかかわる、水と山をめぐる共同。つまり、田んぼの水はお互いに繰出で水源を確保し、水路の維持・管理をして、ようやくお互いに田植えができる。そういう仕方、農業をやっていくための根幹的なものを支える共同が一方である。他方では、屋根の葺き替えをする場合、一軒の家だけでは、あれだけの大量の上質のカヤを一どきに用意することはできない。したがって屋根講とか、地域によってやり方は違いますが、とにかく、何軒か何十軒かの人が協力して、ことしはみんなでおまえのところの屋根をやってやろう、そのかわり、来年はみんなでうちの屋根をやってくれ、こういうやり方で共同してきた。農村では、そのような伝統をもって部落会という組織があって、生産活動上の、あるいは生活活動上のさまざまな相互扶助をやってきたわけです。

それに対して、商業を営んでいる町でも、農村のそれとは違うけれども、先ほどのアーケードはその一つの例でありましょうが、一軒の家だけではアーケードはつくれない、みんなでやればいい、そういうようなものがいくつかありますし、通りの清掃のような、これまた一軒だけでやるよりはみんなでやったほうがいい日常的な活動もたくさんあります。さらにいえば、大売り出しといったような、商売に直結したような活動もあろう

かと思います。そういうような意味で、商店街で、部落会を模型にした、あるいはそれに準じたような仕組みが生まれる。それが、商業を営まない住宅地住民にまで広がってくる。たとえば関東大震災とか、戦時中の銃後体制とかいったものがあり、かつ、それを受け入れるような、広い意味での日本人のものの考え方もたいなものがあった。たいていの都市住民は農村出身者の二世とか、そういう人たちであるわけですから、それがあたりまえなのだという受けとめ方をしてきた、したがって住宅地にも広がった、ということがいえようかと思います。

さらにいえば、戦後、マッカーサーの禁止令のもとですら、新しくできた団地などに自治会ができてくる。団地自治会の活動は、古くからある町内会の活動よりも低調である場合もしばしばありますが、逆に、もっと盛んである場合も少なからずある。団地などの場合にも、自治会をつくって、それが住民を代表する唯一の組織であると、行政側も認めるし、住民たち自身も考えている。この正当性がそのように認められてきているということが、最初に触れたような、町内会は日本の文化を代表する集団形成のやり方なのではないかという見方の根拠になろうかと思います。

ついでにいえば、町内会でやられてきたさまざまな行動の習慣は、モダンな会社組織の中にも、いろいろな仕方で浸透しております。日本人のどんな職場でも普通にやられているやり方、たとえば職場で毎月月給から天引きで1,000円ずつ積み立てておいて、それを、会社の経費では出ないような事柄、冠婚葬祭に使おうとか、そういうやり方は、町内会のやり方の模倣です。こういうやり方が町内会の一般的なやり方として出てくると思うのですが、それは津山でも東京でもどこでも同じことで、さまざまな諸活動が町内を中心にしては町内会に連結した形で再組織化されるということです。

たとえば共同募金です。これはアメリカで始まったコミュニティ・チェストという一種の社会運動でありましたが、それが、戦後、日本に入っ

てまいりました。アメリカの場合でいえば、コミュニティ・チェストに、みんな募金に応募するかどうかは、その都市なら都市の社会的な特徴を形づくるものだと考えられてきました。各都市がどのくらい社会的に統合されているかということを研究する際に、一つの指標として犯罪率をとりました。もう一つの指標として、共同募金の募金率、人口何人に対してどのくらいのお金が集まったかということを基準にしている学者もいるくらいです。ところが、同じことを日本でやろうとすると、とてもできる相談ではありません。なぜかといえば、共同募金会は、全国の募金目標を決めると、それを人口割りにして各府県に割り当てる。各府県は人口割りで各市町村に割り当てる。各市町村は、また人口割りにして町内会に割り当てる。町内会は、目標額を示されますと、目標額そのものを市役所に納めてしまうという形をとっている場合が非常に多いわけです。そしてそれは、町内会費や、ユニセフの募金や、ベトナム難民の募金などといったものと一緒になって、まとめて徴収されるという形になります。徴収という言葉自身が、ある意味では共同募金の趣旨とはまったく違ったものということになると思いますが、本来の共同募金の趣旨でいえば、ことし一年を振り返ってみて、自分はまあまあ幸せにやってこれたじゃないか、この幸せを、不運だった人たちに分かとうじゃないか、ことしはこのくらいの収入はあったし、このくらいのゆとりがあるから、このくらいの応募をしようじゃないかとか、一年に一度そういうことを考えて、貧者の一灯であっても、募金に応ずることに意味があると考えられている。ある意味では精神的な運動という側面を含んでいると思いますが、町内会がそれのみ込んでしまうと、募金の目標額は100%集まります。90%には決してならない。しかし120%になることも決してない。全部町内会で集めて、ちょうど必要な金額を出してしまいますから、お金を集める組織としては、これほど便利なことはないのですね。しかし、一人ひとりの住民は、自分はことし共同募金に応募したかどうかなんてことは、町内会の決算をていねいに見

てみなければわからない。そういう仕組みになる。いい悪いは別として、日本の町内会は、そういう形の仕組みをもってきたと思いますし、その町内会のやり方が古いといって笑っている人たちも、じつは会社に行っても同じことをしているということが、私のいたかったことです。文化というのは、そういう形で、町内会直接ではなくても、さまざまな行動の仕方として、会社社会の中にも浸透しているということです。

3. 町内会の組織的側面

ところで、町内会それ自身について、もう一つの組織的な側面に触れておかななくてはならないと思います。私たちは、町内会を単独の集団としてとらえてしまいがちですし、大部分の社会学者も同じ過ちをしている。たとえば津山の地域社会を見ていくとわかることは、町内会というのは、町内会として単独に組織されている団体ではなくて、町内という、もっと広い社会的な基盤があって、その町内という社会基盤の一つのエージェントとして町内会が働いている。最も重要なエージェントには違いないのですが、ほかのエージェントとして、婦人会があり、最近では大部分の地域で消滅しましたが、青年団——昔の言葉でいえば“若い衆”——があり、最近ではどこにもある老人会や子供会といったような組織があります。これは、年齢階梯組織と専門家がいうものですが、いわば老年に対応した老人会があり、最近の言葉でいえば、実年の世帯主層に対応した町内会があり、そして、主婦に対応した婦人会あるいは町内の婦人部があり、まだひとり者の青年部があり——これは青年団という形をしばしばとったりする——子供会がある。年齢別、性別、あるいは家庭内の役割別にそれが組織されております。

他方には、もっと機能的な組織がたくさんあります。たとえば防犯協会。これはご案内かと思いますが、警察が地域の住民の協力を得たい、そのためには、警察のメンバーとその地域の住民の代表者とが集まって防犯

協会というものをつくって、最近の青少年にはこういう問題があるからこういうことに注意しましょう、といったようなことをやるのが必要であると考えられて、防犯協会がつくられております。しかし、具体的には各地域の防犯協会は、ある意味で有名無実で、じつは町内防犯部の代表者が集まって、警察の人たちと懇談する組織になっております。

同じようなものがたくさんあります。衛生組合、納税貯蓄組合、ありとあらゆる組織が、町内と密接な連携をとって組織されているわけです。別の言葉でいえば、町内会がいくつかの顔を持っているというふうに考えていいのかもしれない。ある社会学者が、町内会を調べたときに、町内会長さんがもっている肩書の数を調べたところ、名刺の表裏に印刷しきれないくらい肩書があった。それは、いま私が挙げたような集団のそれぞれの役職、町内会長であるがゆえにもっている肩書を全部挙げていくと、10とか20とかになりかねないということを示していますし、実際に考えてみれば、ひとりの人間がそんなにたくさんの違った団体に活動ができるわけがないのですが、やられているのはなぜかといえば、防犯協会というのは町内の防犯の集まりであるし、衛生組合というのは、町内の衛生組織の集まりである。それが、役所とある種の連携をもってそれぞれができていたために、町内会長は役職上も、どうしてもそれにかかわらなくてはならないということになって、いま述べたような形になるわけです。

昔はそうだったということではなくて、現在でもそうであります。というのは、最近、全国的に、消防庁が音頭をとりまして、地域の自主防災組織の組織化ということを進めております。これは実際上の必要性が考えられたからです。東京でいえば、関東大震災から60～70年たったが、またあるのかもしれない。消防庁で、もし、あのくらいの地震がまた襲ったとすれば、東京じゅうに何か所ぐらい火事が出るだろうか、出た火事を消防署の力で全部消しとめることができるだろうかというシミュレーションをやりました。結果はもちろんノーでありまして、地震の規模とか位置とか、ど

ういう時間帯に起きるかとかいうことによって実際の数は違ってきますが、ともかくも千数百カ所といったような火災が発生する。それを、専門機関である消防署は消しきれない。となると、考えられたことは、地域の住民が自主防災組織をつくって、たとえば住宅地のボヤぐらいのものは近所の人で一応は消しとめていく。もし寝たきりの老人がいるのだったら、最初の避難広場ぐらいまでは声をかけて連れて来て……というところまでを地域の住民がやってもらえないだろうか。そうすれば、幹線道路沿いとか、危険物の多いところとかは、消防署がきちんと責任をもって防ぎましょう。そして、一応避難広場に集まった人たちは、状況に応じて、もっと安全なところに移すようなことも、専門機関が責任をもってやりましょう。この二つがうまく噛み合って、初めて大震災のような危機が突破できるであります。そのために、地域の住民が自主防災組織をつくってほしい——こういう要請をしているわけです。

静岡県のように、東海大地震の心配があるのじゃないかというようなことがいわれている地域では、住民が直ちに受け入れてこれができたわけですが、その組織化の仕方を見てまいますと、自主防災組織なるものが突然発生することはまったくなかったわけです。静岡県の場合には、大変熱心な“地震知事”といわれた知事がおられ、その意を体して、地震問題に必死に取り組まれた方々がいたわけですが、その方々は、社会学者の書物などもお読みになって、自主的な組織にするためには、町内会に頼らないでやるべきではないかと考え、最初、そういう努力をされたのですが、實際上、組織化はまったく進みませんでした。そして、途中から方針を切りかえて、町内会に自主防災組織をつくってくださいということを頼むようになりました。結果は、非常に短期間にほぼ100%の組織率が達成されたわけです。

そういう意味でいうと、静岡県には、全県民をほぼ網羅するような、自主防災組織ができたわけです。しかし、その自主防災組織なるものの実体

は、町内会にもう一つ看板がふえた、という形になったことになります。そういう形でなければ、100%の組織率ということは、そもそもあり得なかったわけですし、そしてまた、町内会の皆さんも「そうか。なるほど防災というものは自分たちも昔から気をつけてきた、そして自主防災組織という、役所の説明に従えば、消火ポンプであったり、さまざまな服装であったり、装備であったりするものが与えられる。それじゃそういう形をとろうじゃないか」ということに自然になってしまったということであると思います。

そういう意味では、町内会というのは、役所が持ち込んでくる地域の住民が必要とする、ありとあらゆる諸活動を中にのみ込んでしまう。しかし、それぞれの組織のいろいろなルールやメンツもあるわけですから、それを立てて「じゃ、自主防災組織という名前も使いましょう。防犯協会というのに加入したという形をとりましょう」ということで、すべておつきあいをしている。そういう意味でいうと、役所からは、各部局ごとに地域の住民に協力をしてもらいたいいろいろな活動があって、そのための組織化が行われる。しかしじつは、末端——あまりいい言葉ではないと思いますけれども——地域へ行けば、すべての活動は町内会が「よろず引き受け所」になって引き受けている。こういうことになります。

4. 町内会と地域の自治

そのことは、先ほど申したように、行政の末端の引き受け組織になり、そしてまた保守党の政治支配の基盤になっているとあって、しばしば悪口をいわれるところでもありますけれども、最近の津山といったところではなくて、もう一つ歴史をさかのぼって考えると、町内会がかつてもっていた働き、それを全体的に考えなくてはいけないという、最初に述べたことがもっとわかるように思いますので、そのことを次に述べてみたいと思います。

明治期を考えてみますと、このことが非常によくわかるように思います。一例を挙げますと、明治5年、有名な学制というものが発布されました。いまの普通教育の理念をうたい上げたわけですが、有名な「村に不学の戸なからしめ、家に不学の人なからしめん」という言葉があります。つまり、どんな僻村であっても、どんな貧乏であっても、子供たちがすべて学校に行けるようにしましよという一種の新しい教育、国民がすべて基礎的な学習をする。それが日本の近代化の基礎的な条件であると考えられて、これを明治政府が断行したのは、すばらしい英断であったと思います。

しかし、すべての村に学校をつくり、すべての家の子供を学校に通わせるための財源を明治政府は持っていたかという、まったく持っていなかったのです。学校を建てることは政府の力ではできなかつたわけです。東京大学をつくることはできましたが、全国に一挙に数万の小学校をつくるというようなことはできませんでした。実際にどうしてできたかという、町内会ないしその連合体である区が学校をつくる基盤になりました。東京都の資料館に行くと、そういう資料がたくさん残っております。東京でさえそうであったということですが「こんど学制が発布になって、庶民の師弟もみんな学校に通うことになった。大変結構なことでありませう。われわれのこの地域にも学校をつくりたいと思う。そこで、寄り寄り相談をした。教室としては、とりあえずは寺のお堂を借りることに話がついた。次は教員ですが、近ごろのように師範学校とか学芸大学があるわけじゃありませんので、いろいろ苦勞をして、つてをたどって、こういう経歴の人物を学校の先生として呼んでくることにした」次に財政ですが、当時の小学校は、上等何錢、下等何錢と授業料を決めるわけです。その安いほうの授業料も払えない家庭も何軒かはありそうな見込みで、それについては「自分たちが責任をもって、学校に迷惑をかけないようにする。したがって、学校の校舎、教員、財政は一応めどがつくから、この学校を認

可してください」——そういう形で、全国津々浦々、数千、数万の小学校が建設されたわけです。いまの言葉でいうと、学校の敷地や校舎、教員人事、財政、さらには福祉的な活動になるのでしょうか。生活保護世帯の就学補助といったような種類の、自治体行政の中でも最も重要な一領域ですが、そのほとんどを、町内会あるいはその連合体がやっていたわけです。

この時期の刈谷区——区というのは町内会の連合体ですが——の記録がみつかりまして、早稲田の先生方がこれを調べたことがあります。それによりますと、明治前期の刈谷区は、大変莫大なお金を使って、橋とか道路を自分たちでつくっております。ついでにいえば、町内会は国家と同じではないか、つまり、徴兵権と徴税権をもっているのは、国家以外には町内会だけではないだろうかということをいった人があります。徴税権というのはお金を集める権利ですし、徴兵権というのは人々を動員する権利のことです。たぶん、明治初期の刈谷の道路や橋は、建設会社にお金を払ってつくってもらったのではなくて、住民が労力奉仕をしてつくったはずです。したがって、そのためにお金をかなり使っていたということは、大変な事業をやっていたということを示しております。つまり、町内会ないしその連合体が、現在の自治体の業務の中でも非常に重要な部分を占める教育、建設、さらにはいえば衛生、清掃といったような事業を、自分たちで意思決定をし、自分たちでお金や人間や労力を出し合って処理する、そういう組織であったということを示しています。

このような組織は、考えてみますと、国家と自治体以外には普通はないのであります。別の言葉でいえば、町内会というのは、本来は一つの町内というある地域の住民が、自分たちは仲間である、この地域の住民である、そう思っている人たちの全体が組織され、その全体が、一種の最小規模の自治体として働いてきた。明治初期には、その内実も備わっていたということを示しているのだと私は考えます。

そうすると、さっき述べた、多くの社会学者が見落としている町内会のもう一つの性格、一つの地域には一つの町内会しかないということも、非常に簡単に説明がつくはずで。私の家は東京都文京区ですが、この地域の中にほかの自治体はないわけです。それと同じように、一つの狭い限られた地域には違いないけれども、その地域に町内会というものがあって、その家を代表する人たちは町内会という組織に組織化されていて、それは一種の国家や自治体のように一つの領土を持っているということになるかと思います。

一つの地域に一つの町内会しかない、という言い方をしましたのは、じつは町内会はある種の領土権をもっているということにも言い換えることができるかと思っています。そうすれば、また同時に、多くの社会学者が同じように指摘している、強制的ないし自動的な加入ということも簡単に説明がつくことであります。「私はこんな日本のような狭苦しいところではなくて、カナダのような広い国に生まれたかった」といっても、それはしょうがないので「自分がここに生まれてしまった以上、日本人になる」それと同じように、この地域に住んでいる以上はこの町内の会員ですよ、ということがいわれるのは、そういう歴史的な伝統を背負っているということであろうかと思っています。

一種の自治体であった町内あるいはその連合体が、どうしていまのような町内会になったのだろうかということを、次に考えてみたいと思います。

私は、日本の民主主義の発展ということでは、この明治期の活力をもった町内が、自治体の組織に公式に変わっていくということがあれば一番よかったらうという気がいたします。草の根の民主主義ということからすれば、そうであろうかと思っています。しかし、歴史的な経緯はそれとは違っていて、そんなのんびりしたことはしてられない、とにかく早く日本を近代化しなくてはならないということで、政府が中央にでき、県庁がで

き、市役所ができ、村役場ができる。上からの近代化というのは、地域社会に関していえばそういうことであった。そういうことが行われて、町内会、自治体、あるいは部落会というものは、それとは別の、住民が勝手にやっている集団なのだという位置づけを、行政側がしたわけでありませう。実際には、町内や、区の有力者であったような人たちが市会議員や町長さんになったとか、そういう形をとったと思いますが、組織としてはまったく別の、村役場、町役場、市役所ができてしまいました。いままでは、住民が自分たちで、ここに橋をつくりたいと考えて、お互いにお金を出し合い、労力を出し合ってそこに橋をつくってきたわけでありませうが、市役所や町役場ができて、そこが強制的に取り立ててしまった税金の中から橋をつくる予算をつけるというふうになりますと、自分たちがやらなくても役所がやってくれるのだから、放っといてもいいのじゃないか、ということになります。学校の場合もまったく同じことでありませうして、初期は政府が力をもちませんでしたので、住民が自分たちで学校をつくったわけですが、次第に、学校は税金を使って真っ先につくる建物になりました。

しかし、よく考えてみると、慣習がいろいろな形で残っていたことは皆さんは気づかれることと思います。たとえば校地は、農村などでは、住民が無償で共同の土地を提供したという例は少なからずありますし、校地や校舎は役所の税金でできても、音楽教室までは手が回らないから、それは地域の住民が寄付してくれないかといったようなことがよく行われている。そしてまた、音楽室の建物は税金でできてるけれども、ピアノまで手が回らないから、ピアノは町内でなんとかしてくれないかといったようなこともありました。

そういう仕方では、だんだん末梢的な事柄だけが町内の仕事になってきたというのは、教育だけではなくて、道路や橋でも同じでありませう。たとえば、橋を架けるのは役所がやるけれども、住民は二つの働きをもっていて、町内会の二つの働きはそこに集約されました。

一つは、必要な橋を一気に全部架けるわけにいかない。どこに真っ先に架けるか。そこで、自分たちの地域に先に架けてほしいということを請願したり陳情したりする。広い意味でいえば、圧力団体機能というものを町内会がもつようになりました。

それから、いままで自分たちで橋を架けていたのだけれども、役所が架けてくれるようになった。橋を最初にかけるのは役所の税金でやってもらうけれども、住民としては、役所は穴ぼこの手入れまでは手が回らないだろうから、維持・修理・清掃といったことは住民がやりましょう——こういう仕方に関与してきました。これが、最近の学者たちがいう「末端行政の補完機能」と呼ばれる形です。つまり、橋を架けるのは役所がやるけれども、掃除は住民がやりますよ、こういう仕方の分業が生まれてきたのです。

繰り返しますが、現在の町内会の働きから、町内会というものが本来どのようなものであったかということを考えるのは、間違いではないかというのは、そういうことです。現在やっているのは、いまの点に関していえば、ここに橋を架けてくださいと頼みに行く圧力機能、それから、できた橋の修繕や何かは、簡単なことは住民がやりますよという行政末端補完機能。現在の町内会のやっていることだけを見ると、それが出てまいります。しかし、そういうことをするために町内会ができたのではなくて、本来、町内会は、橋を架け、道をつくるという仕事を自分たちの自治的な活動の一環として考えてやってきた。ところが、このような活動の中核的な部分は行政が税金を使ってやるようになって、その中心的な部分から手を引いて、いわば周辺的な部分を担当するようになったというのが、歴史的な経緯であるわけです。

そこに町内会の評価の分かれる理由もあったように思います。ポイントは、本来の自治的な町内会のあり方をどのようにして回復し得るかという形で考えるべきであって、あるいは現在のように行政組織が専門的に確立

した段階ではどうあるべきかという議論は、別途に出なければいけない。その場合に、現在のように、圧力機能と末端補完機能だけをやっていくの
がいいのか、もっと違った形で役割をもつべきなのかということが、今後
の問題としてあるわけですが、これまでの認識としては、本来、自治的な
活動の中核部分を含めてすべてやっていた町内会が、歴史的な変化の中
で、次第に圧力機能と末端補完機能だけを果たすようになってきた。その
活動のあり方が、現在の町内会の運営の仕方を左右してしまっているところ
に問題があるだろうと思います。

というのは、末端補完機能だけになじんでしまった町内会ということに
なりますと、いわば中核的な部分を失った町内会にふさわしいよう
なリーダーしか出てこなくなる。役所から、こういうことをやってくださ
いといわれたことしかししないようなリーダーしか出なくなり、そして町内
会はますますそういうことしかしなくなり、一般の住民はそっぽを向くとい
う事態が起きてきたというのが、今日の問題点であると思います。

これまで私は、後ろを振り返って、町内会がどんなものであったのか、
あるいはなぜこうなったのかということに重点を置いて考えてきたわけだ
ですが、では、この町内会をどうしたらいいのかということ、今後の日本社
会の地域集団のあり方として何を考えるべきかということに話題を移した
いと思います。

現状の町内会、自治会は、最初に述べたように、非常に広い組織率を誇
ると同時に、内部はかなりの程度、空洞化しているということは皆さんが
知っているところです。いろいろな調査で、「あなたはどのような集団に入っ
ていますか」という調査が行われます。いくつかの集団の名前が出てきま
す。そうやって調べた数字でいえば、町内会は東京ではたぶん2割ぐら
いの数字が出ているのが普通かと思います。そうしますと、9割以上の人が
参加しているということと違うのではないかという議論が出てきま
す。この差、仮に実際に加入しているのが95%あって、社会調査で質問さ

れたときに「町内会に加入しています」と答えた人が2割しかいないとしますと、その差の75%の人は、形式的に参加しているけれども、自分が参加しているという実感をもっていない。それが大部分の人たちだということをも物語っているわけです。

あるいは、「町内会というのはうるさくてしょうがない」ということをいう人たちもたくさんいます。これはちょっと古くて、昭和40年ごろ、東京都の民生局で、私どもかかわってやった調査があります。地域の住民、とくに主婦の社会参加活動について調査をしました。その中でこういうことを調べております。「あなた方は、子供が小さいとか、時間がないとか、いろいろな理由があって社会活動をあまりしていないかもしれない。だけれども、もし事情が許したら、こういう活動をしてみたいと思いますか」という質問をしている。具体的な例として、一つには「恵まれない人たちのための奉仕活動」というのを挙げておりますが、「事情が許せばやりたい」と答えた人が9割以上おりました。それから「地域の環境をよくするための集団活動」というのには、これまた「事情が許せばやりたい」と答えた人が9割以上ありました。ところが、「あなたは町内会、婦人会に入って、地域で活動したいと思いますか」という質問に対しては、9割以上の人が「いやだ」と答えたわけです。つまり、簡単にいえば、東京の主婦の大多数の人は、恵まれない人たちのための奉仕活動をやりたいと考え、地域の生活環境をよくするための活動をやりたいと考えるけれども、それにもかかわらず、町内会、婦人会に入って活動をしたいとは思わない。これが大多数だということです。

では、東京の町内会や婦人会が、恵まれない人たちのための奉仕活動や、地域の環境をよくするための活動をしていないかということ、決してそうではなくて、現にいろいろやっている。そして、町内会や婦人会はどこにでもありますから、やりたいと思ったら、すぐにでも加入して活動に参加することができるわけです。ところが、そういう活動をしたいと考えて

いるにもかかわらず、町内会、婦人会で活動したくはないというふうに考えている。活動目標には賛成で、やりたい、しかし、その手段として、ある組織としての町内会、婦人会には参加したくない、というのが大多数だというのは、かなり重要な数字であると私は考えています。なぜそんなに不人気なのかということを考えなければならないということを示している。これは東京の主婦の数字ですから、地方都市、たとえば津山で同じことをやれば、数字はまったく違ったものになるだろうと思います。全国的には非常に違った形をとるでしょうが、東京の数字が、比較的近い将来を推測させるものであるということも否定できないのではないかと考えております。

なぜ、町内会、婦人会は人気がないのか。そうなりますと、もう一度もとの性質に戻っていくことになります。どこそこの川を美しくする会、とか、どこそこに何とかを建てさせない会、とかいう組織でありますと、活動の目標は一つに完全にしぼられておりますから、その活動目標に賛成の人が参加して活動して、うまくいけばやめてもいいわけだし、失敗したから断念するということもあるかもしれない。ところが、町内会、婦人会は包括的な集団でありますから、参加すれば、ほかとのいろいろなうらさいかかわりができてくる、だからいやだ、こういう人もけっこういるわけですし、町内会や婦人会の活動の仕方はなまぬるいということをいう人もいます。なぜかといえば、全員が参加しておりますので、だれからも反対されないような事柄しかやれない。いろいろな問題については、人々の意見は千差万別ですから、こういうことがいいと考える人と、悪いと考える人がいる。そういうことになると、町内会はタッチしないようにする。だから、ああいふ団体では、生きがいのあるような活動に取り組むことができないからいやだと、これも少なからずあることです。それから——これは半分原因であるし、半分結果であるわけですが——役員が固定化しているとか高齢化しているとか、したがって、新しいアイディアを出してもなかなか

か受けつけてもらえない。それやこれやで、町内会、婦人会系の集団というのは、最近では不人気になっているということがあります。これはだんだんなくなるだろうとか、なくしたほうがいい、といった意見も、一つにはそこから出てくるだろうと思います。

5. イギリスの住民活動

かれこれ10年ぐらいい前になりますが、私がしばらくイギリスに住むという機会をもったときに、なぜイギリス人は町内会がなくて生活ができるのだろうかということをずっと考えていて、いろいろ質問をしたりしておりました。たとえば、もしかしてテムズ川が氾濫した場合を予想して、ロンドンの町の地下鉄の駅には、水没する地域の範囲を示した地図が張り出されております。もし、大規模な氾濫が起きれば、食料がないとか、いろいろな問題が起きるだろう。たとえば、役所は住民に乾パンを配るとかなんとかすることがあるだろうが、その乾パンはどうやって配るのだろうか。日本であれば、区役所に貯蔵してある乾パンを住民に配る手段というのは当然町内会で、倉庫から乾パンを町内会に持ってくれば、町内の住民が人海戦術で配ってくれることが予想される。ロンドンの町に町内会がないとすれば、だれがどうやって配るのだろうか。それが疑問でした。いろいろ聞いてみたのですが、「ラジオで、どこそこで乾パンを配っているからどこそこに来なさいということを放送することになるだろう」ということであります。そうなると、私も日本人のひとりとして心配になります。そんなことをいったって、寝たきりのお年寄りとか、ほんとうに必要としている人のところには届かないのではないか、もらえないのではないか、悪いやつがいて、二度も三度も並んで、2倍も3倍も乾パンをもらおうやつが出るではないか……。そういう質問をさらにぶつけると、イギリス人は肩をすくめて考え込んでしまいます。「まあ、百パーセント配るってことは無理だし、ほかに方法はないだろう」と、こういうことです。

では、イギリスの社会では乾パンはそのように全部に届かないだろうかということを考えてみますと、これはだれも証明ができないのですけれども、私は、かなりの程度配れるだろうと思います。私がやはりロンドンにいたときに、ちょうどパン屋さんのストライキがあって、店頭のパンが消えたことがありました。しかし、そういう場合には、独り暮らしのお年寄りにときどき声をかけるというようなことをやっているさまざまな集団が、さまざまな地域にあり、大部分のお年寄りに何らかの接触がそここで行われている。そして、あそこに行けばパンが買えるよということを教えてくれる。

したがって、そういう災害の危機のときでも、仮に役所が食料を配れば、大部分の人に届くだろう。しかし、百パーセント届くという保証があるかといわれたら、だれもイエスとは答えられない。日本の役所流に、すべての住民に食料を配布することを保証する手段があるか、などといわれれば、ノーといわざるをえないけれども、実際上は大部分の人に届くだろう……。これが、イギリスの社会ならイギリスの社会で現実的なやり方だとされているわけですが、日本の場合には、町内会という全員加入の組織がありますので、そういうときの食料の配給の仕方といったようなことになると、非常に都合がいいことがあるだろうと思います。

戦時中に町内会が食料の配給について果たした役割は大変大きなものがあつたと思います。町内会は戦争協力の非民主的な組織であるから、けしからんから廃止しろということを迫ったマッカーサー司令部でさえ、じつは戦争直後には町内会を利用しておりました。若い方はご存じないと思いますが、私は当時中学生で、食べ物がなくて大変困っていたときに、町内会に配給があつた。鍋を持って町内会長の家に行くと、町内会長はうやうやしく、コンビーフとか、ヘットとか、ラードといった、つまり、ラベルのついているような缶詰めじゃなくて、軍隊用の灯油かんみみたいな巨大な缶詰を開けて、ヘットやコンビーフを配ってくれたのを覚えております。

そういう意味で、危機的な状況の中ですべての人々に食料を配給しようというときには、この町内会のシステムは大変有力な手段になるわけです。

日本の町内会のことを、イギリスのこういう組織化活動にかかわっている人に話しますと、大部分の人は、信じられないという顔をして、肩をすくめてしまいますが、ある人は「それこそ私たちが求めていたものだ、日本にそういう組織があるのは、うらやましい」ということをいいました。すべての人が加入している組織があることのプラス面というのは、非常に大きなものがあるように思います。西欧の社会は、そういうものがないために、逆にボランタリストティック（自発的）なさまざまな集団がたくさんなくては濟ませない社会をつくってきたということになると思いますし、日本の社会は、町内会というものをもったために、町内会が全体を見ている。

したがって、そのような多様な集団をそんなに必要としない。そして、防災組織をつくり、防犯協会をつくらうとすると、町内会が全部吸収してしまう。こういうやり方をとってきたということになると思います。

そういう意味では、当面、私たちが今後の問題として考えなければいけないことは、日本の社会も、やがてイギリスのような、ボランタリストティックなさまざまな集団がたくさんあって、いろいろな活動をしているような形をとったほうがいいのか、それとも、これまでどおり町内会が全部を統括していて、あらゆる活動の中に包み込む形でやっていたほうがいいのか、という問題になります。

イギリスの場合で、なるほどなあと思ったのはこういうことです。私がロンドンにいたとき、エリザベス女王在位25周年記念“シルバー・ジュビリー”というお祭りが至るところで行われており、私が住んでいたそばの公園では、地域の人たちを中心にいろいろな活動をしておりました。仮装行列のパレードが行われたり、メリーゴーランドの回る簡単な遊園地みたいなものがつくられたり、犬のお行儀のコンクールがあったりしました

が、中で一つ面白かったのは、大きなテントを張って、その中に地域のさまざまな集団が、日本の中学や高校の文化祭のように、自分たちの活動内容を展示していたことです。そういう機会に、もっと多くの人に参加してもらえるようにと思って、自分たちの活動を詳しく展示している団体もありましたし、のんびりした集団になると、ただ、くじを発行していて、10ペンス払って当りくじが出ると、20ペンスもらえて、はずれくじに当たると1ペンスももらえないというような、非常に投げやりな集団もありました。しかし、その中には、地域の緑化を進めようという団体とか、外国人に英語を教えてあげて、イギリスの社会に定着してもらおうというような運動だとか、がんの検診をみんなが受けるようにしようという活動をしている集団だとか、ありとあらゆる集団があります。いってみれば、それは、日本では町内会に連絡が来て、がん検診に行きましょうという回覧板が回るとか、そういうやり方で処理されているものが、一つ一つ別々の集団活動として営まれているのが彼らのやり方でありました。プラス面は、たぶん、一人ひとりの人間が自覚して、自分はこの活動をしようと思って参加して一生懸命活動しているということで、そういう集団の性質があるというのが、大きな特色であるだろうと思います。自主性という点では、これは非常にすばらしいし、市民社会と呼ばれるものを支えているのがそれだ、ということがわかりました。

私がこのお祭りで気がついて、非常に興味をもって、一年間ですが会員にしてもらった集団があります。私の住んだ地域はフィンチレーという、ロンドンの北の郊外、サッチャーさんの選挙区であります。そこに「フィンチレー・ソサエティ」という名前の団体がありました。会を結成した動機は、自分たちはフィンチレーという土地が好きだ、フィンチレーというところは、昔は、ロンドンから北へ行く街道沿いの宿場町として栄えたところであった、ところが最近では郊外化が進んで、何の変哲もない住宅地になってしまった、これはやむを得ないけれども、最近では、それに合

わせて行政区画まで変わってしまって、フィンチレーという行政区画がなくなり、日本流に言えば、大ロンドン都バーネット区というところに合併になり、フィンチレーのことを何も知らないお役人が、バーネット区役所の机の上で勝手にいろいろなことを決めてしまう、フィンチレーの歴史、雰囲気、伝統、そういったものが日に日に失われていって残念である、だから自分たちはこういう団体をつくった、ということでありました。

活動の内容は、一つは緑化であります。フィンチレーには昔から、何とかオークという樫の木の種類があって、これが景観を形づくっていた。この木が減っていくのが残念であるというので、田舎の農園と契約して、苗を育ててもらって、空き地を見つけては、清掃をしてそこに植え込んでいくという活動が一つありました。

もう一つやっていたのが、日本流に言えば、町並みの保全活動です。彼らは、三角形の茶色い屋根に、煙突が両側から出ていて、丸や六角形の出窓がついているなど、さまざまなデザインをこらして、みんな同じような家に見えるのだけれども、少しずつ違った、工夫した家に住んでいます。その家の中にも、ビクトリアン（ビクトリア女王朝風）とかジョージアン（ジョージ王朝風）といったそれぞれの様式がある。それを非常に大事にして、自分たちで守っていく活動をしておりました。住民が町並みを守っていく——いったいどうやってやるのだろうか、私は大変不思議に思いました。調べてみると、悪口をいわれていたバーネット区役所がみごとなことをやっている。日本流に言えば、建築確認申請に当たりましょうか、「ジョージアの古い建物をとり壊して新しいモダンなアパートを建てたい」というので、建築確認申請みたいなものが出る。バーネット区役所は、その申請書のコピーをとって、黙ってフィンチレー・ソサエティに送ってくる。フィンチレー・ソサエティは、何通りの何番地……ああそこかと、知っている場合もあるし、調べたりもする。そして、ここには何とかオークが茂っていて、こういう道が曲がっていて、そこにジョージ王

朝風のこういう建物があって、こういう昔の思い出があって、なかなかいい……。そういうことをみんなで話し合うと、意見書を出します。外側は、傷んだところを全部直して、レンガが割れたらレンガを埋め直して、ペンキがはげたらペンキを塗り直して、窓枠を取りかえて、もとどおりきれいにして住んでください、中はどんなに近代化してくれてもいいです、と。近代化というのは、二重窓にするとか、セントラルヒーティングにするとか、いろいろなことがあります、そうやって、中は住み心地よくして、外は昔どおりのおもかげを残した町並みを保全しなさい、こういう意見書を出すわけです。その意見書が大体は尊重されて、行政指導が行われるという仕組みであります。

私がうらやましく思ったことは、こういうことを根ほり葉ほり聞きに行きましたら、リーダーは、おまえ、そういうことに興味があるのだったら、私のところに来る前に、まず〇〇通り〇〇番地に行って見てこい、われわれが意見を出したおかげで、昔どおりきれいになって、人が住んでうまく使われている、それを見てこい、という。あれは自分たちの努力が足りなくて失敗したとか、ぼんやりしていて失敗したとかいう失敗の例も挙げてくれました。

非常に違うのは、この町を守っているのは自分たちの手柄であり、怠けたのは失敗であると考えていること。私たちの社会では、町並みが悪くなったのは、建てたやつが悪い、役所の都市計画課がボヤボヤしているからだ、という悪口をいい、自分たちがそのために何か役割を果たせるというふうには考えていないように思います。そこがたいへんすばらしいと思いましたが、自主性ということで、私が、まいった、と思ったのはこういうことです。

このフィンチレー・ソサエティのメンバーは数百人ですが、毎月ニュースを出しています。ニュースでは、そのニュースを各家に配るのを郵便局に頼んだのではお金がかかる、かわりにこのニュースを配るボランティア

がないかというようなこともやっていました。そのニュースに、あるとき、こういう記事が載りました。パーネット区の市民大学で、ことしはフィンチレーの郷土史のクラスがある、皆さん、奮って出てください、というものです。このパーネット市民大学はなかなかおもしろくて、これも私の研究対象の一つでありましたが、1年間に30週、きちっとした時間割が組まれて、たくさんのクラスが設けられている。たとえば私の子供が小学校長さんから紙きれをもらってくる。見ると、お父さん、お母さんは、そこの英会話クラスに出て英語を勉強なさったらどうですか、というようなことが書いてある。それはすべて有料なのですが、たとえばこれから永住しようとする人たちが英語を勉強するクラスに通いますと、1年間1ポンド、つまり実際上はただ、名目的に有料の授業料を払う。ヨーロッパ大陸あたりから若い人がやってきて、英語の資格をとって、いい就職口に就きたいという人からは、何十万円という月謝をきちんと取る。フィンチレーの郷土史のクラスは、半年間のクラスで十数ポンド、当時の感覚で6,000~7,000円の月謝が必要だったと思います。

フィンチレー・ソサエティのニュースには、次のこういうことが書いてありました。ことしはフィンチレーの郷土史のクラスがあるから奮って出てください、ただし、もしこの6,000~7,000円ほどの月謝が負担になって、出ようか出まいか迷っている人がいたら、申し出てください、私たちが代わりに月謝を払います、と。それで、私はがくぜんとしたわけです。つまり、ここでは住民は自分たちでお金を払って勉強するのはごくあたりまえと考えて、フィンチレーの郷土史などに興味をもってくれる、若くて、しかしお金がないという人がいるならば、お金は出してあげるから勉強してください、そして、やがては会員となって自分たちの活動を盛り立ててください……。こういうことまで自分たちでやっている。

そこへいきますと、残念ながらわが国の町内会は、役所からお金をもらうことはわりと熱心ですが、自分たちの責任においてやるという自主性に

ついでには弱いものがあり、そのために多くの人々の参加意欲を削いでいるという側面がある。残念なことに、全員参加という町内会の基本原則は、ここではマイナスに働いているということではないか。フィンチレーに数万人の住民がいて、数百人の会員が、町並み保全を一生懸命やっている。では、残りの59,000人は何をしているのかということも、ある意味ではいえるかもしれない。しかし、その600人なら600人は一生懸命活動している。残りの59,000人のうちの何百人かの人は、がんの検診の問題を、一生懸命やっている。こういう仕方では、さまざまな集団がそれぞれ自主的に活動しているというのが、いわば市民社会の形であるとする、私たちの社会はもうちょっと違った形をとるべきではないのか。むしろ彼らのやり方をそれなりに取り入れる必要があるのではないか。こういう議論も出てまいります。

6. 町内会の文化変動

昨年、日本都市社会学会でこの問題を取り上げてシンポジウムをやったわけですが、その中のある報告者が、こういう問題提起をされました。「町内会がいくつかの点で活力に乏しい問題状況を抱えていることは事実である。ただ、日本でも、さまざまなボランタリスティックな集団ができてきて、いろいろな活動をするようになった。それがこんどは、町内会にも影響を与えて、町内会自身を変えていく。町内会の一文化変動というものが起きてくる。こういうケースもある。つまり、さまざまなボランタリスティックな集団が活性化してくると、町内会も負けていられなくなって、自分たちの集団のあり方、運営の仕方、活動の領域、そういったものを変えてくるのではないかと。いままで述べてきたように、明治以降、町内会はそのあり方が、基本的な面ですら変わってきたわけですから、今後永久にいまのやり方が変わらないという保証もない。これ以上発展性がないというふうに考えるのもおかしいのではないかとということにな

ろうかと思います。その点で、私はこの方に基本的に賛成です。どこにそういう変革の可能性があるだろうか。一方では、町内会がもっている長所をどうやって生かしていったらいいのか。変革すべき部分と、町内会が守っていくべき部分があって、もう一つ構図の上で考えられることは、町内会だけではなくて、さまざまなボランティアスティックな他の集団もたくさんあって、その中で町内会も一定の役割を担う、こういう絵を描くことができるだろうと考えます。

というのは、たとえば町内会でなくては果たせない部分、これはいくつかあります。それは、多くの人々が、町内会に形式的にもせよ参加していて、情報のネットワークが形成されている。これは大変なことであると思います。

そうだとすると、町内会は、いわば情報が集まり、分配する拠点だ、こういう位置づけが一つできるだろうと思います。一生懸命に何かをやっている集団、たとえば、テニスが好きでテニスを一生懸命にやっている人たちがいる。しかし、自分たちと同じようなレベルと一緒にテニスをやろうという人が、自分たちの地域のどこにいるのかわからない。同じ気持ちをもっている人がたくさんいるだろうということはわかる。だけれども、だれにどうやって声をかけていいのかわからない。これは大都会になると当然起きてくる事柄です。現在非常に盛んになってきているスポーツ活動なんかについて調べてみると、強く出てくるのは、施設が足りないということ。テニスなどはことにそうかもしれません。もう一つは、仲間が欲しいのだが、仲間が得られない。いわゆる大都会の孤独であって、情報は氾濫しているのだけれども、自分たちの地域で、日常的に、そばのテニスコートで同じくらいのレベルの人と一緒にテニスをやりたいのに、そういう情報はほとんどない。それが提供できるのは、たぶん町内会だけではないだろうかという気が、私はしてならないわけです。

そういう意味では、情報のネットワークを支える非常に重要な集団であ

ることが一ついえるだろうと思います。そしてそれは、先ほどいったような、戦時中とか戦争直後の混乱期の食料配給に果たした役割とか、災害が起きたときに果たせるであろう役割とか、そういったものと当然に結びついてくると思います。いわば危機的状況で下支えをする組織としての重要性ということが一つ。

もう一つは、地域の住民の合意をとりまとめる機能です。これは、少なくともこれまでの日本の社会の文化的な伝統に照らして、これ以外に、地域の住民の意思を代表するということを正当だとみんなが認める組織はできないだろうと思います。たとえばボランティア活動をしている人たちも、何かの文化活動をしている人たちも、ミニコミ誌を発行しようと思っている人たちも、自分たちで源氏物語を勉強する機会をもちたいと思っている人たちも、みんなそれぞれに、たとえば集会所が欲しいと考えているだろうと思います。しかし役所は、源氏物語の勉強会をひと月に1度開く集団があるから、その集会所をつくりましょうというようなことはできないわけです。ただ、もしそういう集団がたくさんあって、さまざまな集団が活動するためにそういう集会所の施設があると便利だということによってみんなの意見がまとまっている、だからつくってほしい、と町内会から申し出があれば、行政はこれを無視することはできないということになるだろうと思います。もちろんそのためには、先ほどいった情報機能があるということが前提ですけれども。そのようにして、さまざまな集団、サークルとか、社会学者の言葉でいえば機能集団とか、ボランタリストティックな集団と呼ばれているような、たとえば文化活動や、スポーツ活動や、ボランティア活動、あるいは、いわゆる住民運動など、さまざまな活動をしようとしているさまざまな集団をとりまとめて、必要な事柄について住民の意思を代表して、それを行政に伝えるという働き、この役割は町内会、婦人会が果たす以外には、果たし手はたぶんないだろうと思います。

これに対して、個々の具体的な問題に対する取り組みという点で考えま

すと、町内会はどうしても、先ほど来触れてきましたように、参加意識というものがそんなに高くないとか、メンバーの中に意見の違う多様な人々が含まれているとか、そういう問題を抱えています。あるいは、町内会が他の集団と違うもう一つの特徴は、「永久になくならないはずの組織」ということです。これまた一種の自治体としての特徴ですが、未来永劫続くことが予定されている。どこそこのスーパーの出店に反対する運動、であれば、スーパーが撤退すればやめてしまえばいいわけですし、それにもかかわらずスーパーができてしまっても、あきらめてやめるほかないわけですけれども、町内会は未来永劫やらなくちゃいけない。そうだとすると、集団維持ということにかなりのエネルギーを使わなければならない。このために、先ほどいったように、町内会の活動はなまぬるいということに、どうしてもなってしまう。そうだとすれば、具体的な個々の問題について反対運動を展開しようとかいうような活動については、町内会、自治会がやるよりは、むしろそれぞれの、それを一生懸命やりたいと思っている人に委ねたほうがいいのかも说不定。そのような意味で、ボランティアシックな集団というものが最近非常に注目を集めているということであると思います。かつてのように、共同募金であるならばだれもが反対しないような活動であります。ベトナムからのポートビブルを救う活動をしようということになると、これはまたある種のイデオロギー的な問題がかかわってきますから、町内会がやるよりは、その問題を一生懸命考えようと、ある一定の考え方に基づいてやっている人たちの活動のほうが中心にならざるを得ないだろうと思います。そういう、いわば町内会が取り組みにくい活動がふえてきているということは、一方で否定できない。

逆に、町内会でなければ取り組めないであろう活動——先ほど私は「地域住民の合意形成」という言葉でいいました。ある学者は、非常に似たことを別の言い方でいいました。「地域の共同管理の活動が町内会の中心的な仕事ではないだろうか」と。たとえば道路計画であったり、学校の設置

計画であったり、先ほどいったような集会所の問題であったり……等々、地域に共通に非常に大きな影響を与える事柄について——私の言い方でいえば意思決定を行うという活動ですが、別の見方でいえば、そういう共同管理活動が、町内会がこれから果たすべき中心的な領域ではないだろうか、という意見もあります。対立する意見というよりは、たぶん同じ事柄を別の観点から見たということになってくるのではないかと思います。

そうなりますと、これからの地域社会を考えていく上で大事なポイントは、それぞれに異なった役割を果たす、一方に町内会あるいは婦人会といったような集団があり、他方にはさまざまな個別の目的をもったたくさんの集団がある。この二種類の集団がどこに接点をもって、ある種の協力関係、ある種の競争関係を維持することができるだろうか、ということに最終的にはなっていくだろうと思います。

非常に単純に考えれば、一つの見方は、町内会は、情報の中心としてさまざまなボランティアスティックな集団のいわば待合室という役割を果たすべきではないかと、いうことがいえると思います。お茶のけいこをしたいというサークルがある。そこで、町内会が応援して場所などをお世話します。会員の皆さんに教えてあげます、だからおやりください、ということができる。さらにいえば、そういうものがたくさんになってくるかもしれない。お茶も、表千家もあれば裏千家もある、踊りにもいろいろなグループがあるとかいうことになりますと、町内会が一つに統制してしまうのではなくて、さまざまな集団がそれぞれ活動できるように、それじゃ集会所の使い方は曜日分けてこういうふうに調整しましょう、といったような調整を含めて、待合室的な機能を果たしていくということが一つのあり方として出てくるだろうと思います。

ただし、その二つの種類の集団というのは常におめでたい関係ではないだろうと思います。ある種の対抗的な協力関係といえますか、ある種の緊張をはらんだ協力関係ということが現実的であるのではないかと思いますので

す。一般論というよりは、具体的な例でお話ししたほうが良いと思うので、一つの例をお話します。

静岡県の清水市に飯田地区という地区があり、ここに「飯田をたがやす会」というユニークな集団があります。これは、公民館で「これからの町づくりを考える」という講座があったときに一緒に勉強した人たちが、町づくりについて勉強したのだから、われわれも何か活動を実際にじてみようじゃないかというのでつくったものです。「飯田をたがやす会」なんていうと農民の集団というふうに受け取られるかと思うのですが、二宮尊徳ですか、「心田を耕せ」という言葉があるそうですね。飯田という地名は「田」という字がついておきますので「心田を耕す」という言葉をもじって「飯田をたがやす会」にした。普通の言葉でいえば「飯田地区をよくする会」みたいな会ですが、この集団、じつは町づくりの勉強を始めた段階で、町内会と、ある種の紛争が起きました。

飯田地区をよくするというようなことを考えるのは、町内会が本来していることであって、おまえらどこの馬の骨かわからん人間がやりだすのはけしからんとか、それを行政が援助するのはおかしいのではないかと、といったような声がありました。この人たちは、そういう声が出てくると、勉強会を一回、町内会の人たちと自分たちの討論会に切りかえてしまい、町内会の人たちと、いろいろ議論をしてみるというようなことをやりました。そして「たがやす会」ができてからの活動というのは、郷土史の勉強をしてみようとか、あるいは優雅な月見の会をもとうとか、月見の会をもったときには、会員のお嬢さんが琴を弾くとか、いろいろなことをやりました。

さらにもっと突っ込んだ活動、たとえば高速道路にバイパスができるという場合、そのバイパスというのはどういう計画であるのか、市役所の土木部長さんをお呼びきて勉強会を開く。そして、協力をしよう。だけれども、高架で道をつくるなら、その下を自転車置き場にして地域社会のため

に役立ててはどうか——そういう知恵も出す。いろいろな活動をしました。中で一番おもしろかったのは、飯田祭りというお祭りをやっているわけですね。この地区は、「飯田型」という弥生式の土器が出る由緒あるところで、郷土史の勉強なんかも、それをきっかけに盛んになったのですが、お祭りにはシンボルが要るだろう、オリンピックの聖火みたいなものをやろうというので、火打ち石で火を切って、たいまつにつけ、たいまつ行列をやりました。私は16ミリのフィルムを見せていただいて笑ってしまったのですが、子供たちがたいまつを持って行列をする。子供たちにはお父さんのワイシャツをうしろ前に着せ、要所要所を縄で縛ります。そうすると、年配の方だったら想像がつくと思いますが、神武天皇みたいなかっこうになるわけです。それを使って「弥生の火」の行列というものをやりました。このお祭りには地域の住民の多数が参加して、こちらではオセロゲーム大会がやられている、こちらではおばあさんと孫の二人三脚の競争がやられているといったような、大変なお祭りになったわけです。

じつはこのお祭りは、「飯田をたがやす会」の人たちが言い出しっぺでありましたが、主催者は町内会でありました。「飯田をたがやす会」の人にいわせると、自分たちでやってもよかったのだけれども、やろうとすると皆さんの協力が得られない。一つには寄付金の集まり方が違う。町内会でお祭りをやればたくさん寄付が集まる。町内会でやったおかげで、さまざまな資材や道具などについて消防団の協力が得られた。こういうことで、「飯田をたがやす会」の皆さんは、知恵を出すけれども、主催者は町内会という形をとりました。町内会側からすれば、これは文化変動なのかもしれませんが、いままで何もしないで居眠りしていた町内会が、「飯田をたがやす会」なんぞに負けてはならんということになりますと、自分たちが主催者になってお祭りを組織していく。もちろん、けんかするわけはありませんから、「飯田をたがやす会」の人たちが中心に活動してくれてもいいわけですし、知恵を出してくれるのは大歓迎という形で、協力が

行われる。これをきっかけにして、飯田地区の町内会そのものが活性化していくということです。

このような、一種の緊張関係をはらんでいるけれども、相互に協力した関係というものが存在すると、町内会は、町内会でなくてはやれない特徴を自覚していくようになりますし、いままでのように、お役所からいわれたことをただやっていたというような町内会運営ではほんとうの町内会ではないのではないか、そういうことを考えるようになっていく。こういう一種の緊張をはらんだ関係というのは、そういう意味では、「飯田をたがやす会」のようなボランティアスティックな小さな集団も、活力が出てくる。自分たちの仲間うちだけではやれなかったことが、町内会という大きな組織と連絡したことによって活動ができていく、こういうことがいえるだろうと思いますし、町内会側はいわば知恵をもらい、活性化のきっかけを、そこにつかんでいくということができるとも思います。

こういう種類の関係が至るところでできてきますと、これまでの町内会のあり方が変わってくるし、町内会というものがけっこうおもしろいぞというふうに、若い人が考えるようになってきたらしめたものだ、ということになると思います。これまでですと、町内会に出かけて行って何か意見をいっても、新米の意見なんかは取り上げないという雰囲気であったり、意見をせっかく出しても、昔にこういうことがあって、そういうことはだめだということは、私たちは経験者でよく知っているから、あなたは黙っていなさい、というようなことになる場合が多かったわけです。したがって、町内会は不人気な集団の代表のようになってしまいました。しかし、いまのような活動を展開していくことになると、そういう昔のことを知っているだけのお年寄りでは、運営できなくなってきた、否応なしに、若い意欲をもった人たちが参加してくるようになるし、その人たちの意見が、どんどん出せるような状況になってくる。こういう点も、非常に大事なことだと思います。

最後に、もう一つの話題の領域があると思います。

いま私は、一般的にどういう形が望ましいかということをお話したわけですが、最近では、コミュニティ行政というような、行政とのかかわりが問題になってきている。このことを最後に述べておきたいと思います。

昭和45～46年ごろから、自治省が「モデルコミュニティ事業」といったようなものに取り組み、そして各種の行政機関がコミュニティ行政ということを考えるようになり、現在では、全国の自治体の約3分の2が、長期計画基本構想の中で、コミュニティ形成ということを目標の一つに取り上げるようになりました。そして、さまざまな実験的な施策が行われているわけですが、その際に大きな問題になったのが町内会でありました。当時の自治省の担当者は、この政策を発表しますと、保守党から呼び出されて叱られたそうです。おまへたちは、自分たちの基盤となっている町内会を切り崩すつもりで、コミュニティなどという、わけのわからないものを始めたのではないかと。それになんとか答弁して帰ってくると、こんどは革新政党から呼び出しがかかって、おまへたちは、自民党の支持基盤である町内会を強化する目的で、こんなへんなことを始めたのではないかと、けしからん、こういう詰問があったそうです。

そういう意味では、このコミュニティ行政というのは、町内会をどう位置づけるかということで、最初から大きな問題を抱えたということになったわけです。ある地域では「コミュニティ協議会」といったような組織ができてきて、それは町内会とは切り離されて、文化団体とか、いろいろなサークルからリーダーが出てくるという形をとって、町内会が窓際に追いやられるという形になり、町内会側の反発が強かった地域も若干あります。しかし大部分の地域では、たとえばコミュニティセンターができる。その運営を住民が自主的にやってもらいたい、そのためには「コミュニティ協議会」といったような団体を組織したほうがいい、ということで組織されるわけですが、これもまた、先ほど述べた町内会原理の中に吸収され

る。「コミュニティ協議会」の大部分のメンバーは町内会の役員層であり、それに婦人会の代表とか、文化団体の連合会の代表とか、そういった若干の人が加わってその組織ができる——こういう形で、実質的には確かに町内会のテコ入的な施策が展開された地域がかなり多かったわけです。

このことは、プラス、マイナス、いろいろな側面を持っているように思います。町内会流に吸収されて、そして町内会が不人気であるがゆえに、コミュニティ活動が盛んにならないという場合もあります。プラス面を数えていけば、これまで比較的狭い自分たちの町内という範囲で、ものごとを考えていた町内会のリーダーたちが、こんどは小学校区といったような比較的大きな地域の範囲で、ものごとを眺め直すという機会をもつようになった。ある意味では、本来の町内会の活性化にコミュニティ施策が役に立った部分であると思いますが、おかげで、町内会の活動自身が、先ほどの言葉でいえば、地域の共同管理的な問題へと、もう少し目を見開いていくきっかけになったという側面が、一方にあると思います。

他方では、町内会がこれまでさまざまな行政の下請け的機能、つまり防犯であったり、防災であったり、募金であったりしてきた。その一つとして、コミュニティというものが単に加わった。こういう形になって、町内会自身が行政から声をかけられると、いわれただけのことをする集団という側面が一層強化されてしまって、町内会の悪い側面が、コミュニティ施策と結びつくことによって、むしろ広がってきたという地域も、残念ながらいくつも見受けられるわけです。

そういう意味で、基本は住民自身に、町内会というものがもっている問題点と、日本の社会の一つの特徴的な武器として、それを使いこなしていくというような新しい血が流れ込み、新しいものの見方で町内会がとらえ直されることが必要であるわけですが、そのプラスのきっかけにも、コミュニティ施策というものがなり得るし、あるいはそれを生かす住民の努力が出てこない、町内会がますますボス支配的な色彩を強める。それをしり

押ししているコミュニティ施策ということに、結果的になってしまっている地域も見受けられる。そういう意味では、これからどうなるかという問題は、まさに全国のそれぞれの地域の住民が、町内会とかコミュニティというものをどういう目でとらえて、その集団や組織のあり方を組み立て直していくことができるかにかかっているように思います。



(左から越智，加太，日下部，青井，倉沢の各氏)

第2部／座談会

町内会を考える

《出席者》

(敬称略・発言順)

倉 沢 進 (東京都立大学教授)

加 太 こうじ (評論家)

越 智 昇 (横浜市立大学教授)

日下部 禮代子 (評論家)

司 会 青 井 和 夫 (津田塾大学教授・当研究所理事)

はじめに

青井 本日はお忙しいところをご出席いただきましてありがとうございます。ありがとうございました。

当研究所では、シリーズ誌の『コミュニティ』と『高齢を生きる』を、年に4～5冊の予定で発行しております。きょうは、『コミュニティ』誌第79号といたしまして、町内会の問題をお話し合い願うわけでございます。

ご出席の先生方をご紹介します。

まず、今回、メインリポート（第1部 報告）をお書きいただいた都立大学教授の倉沢進先生です。倉沢先生は、日本社会学会の中の都市社会学の中核的存在で、このたびは、なかなかおもしろいリポートを書いてくださいました。

年齢順に紹介させていただきますと、評論家の加太こうじ先生ですが、私が最初に加太先生の論文を拝見したのは、たしか『思想の科学』だったと思います。その内容はやはり紙芝居のことでした。非常におもしろい発想をされる方だなど、印象深く覚えております。また本誌第42号「余暇とコミュニティ」にもご出席いただいております。

次は、横浜市立大学の社会学の教授をおやりになっている越智昇先生です。越智先生は、都市だけでなく、農村のほうも加えまして、地域社会学の研究をおやりになっているのですが、地域社会学というよりも、その中におけるアソシエーション、とくにボランティア・アソシエーションの研究を精力的におやりになって、いろいろな論文を書いておられる方でございます。

最後は、評論家の日下部禧代子先生です。日下部先生には、本誌第45号「社会福祉の国際比較」というテーマでご参加いただき、おもしろいお話をうかがいました。日下部先生はイギリスでずっと過ごされ、向こうの大学を出ておられますので、外国、とくにイギリスのおもしろいお話などを、お聞きできるのではないかと考えております。

それでは、お話し合いにはいる前に、まずメインリポーターの倉沢先生から、自分としてはこんなことがいいたかったのだということを、要約してお話しただけませんか。

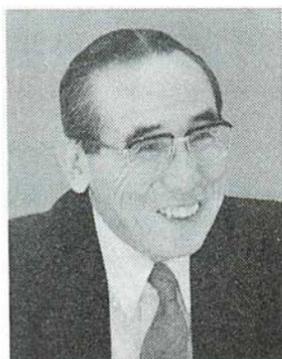
1. メインレポートの要約

倉沢 お読みいただいていたいへん恐縮でございました。口述筆記でつくりましたので、だらだらしたものになり、ご迷惑をおかけいたしました。

町内会というのは、日本独特な、日本の文化の特色の一つを形づくっている集団だということを書いたのですが、町内会というものについては、とかく、町内会善玉・悪玉論と申しますか、これは、いいものか悪いものかという非常に短絡した議論が行われている。そして、その議論の根拠になっているものは何かというと、現状の町内会がどんなものであるか、さかのぼって、せいぜい戦時中にどうであったか。そういうことに基づいて、いいとか悪いとか、必要だとか、自然になくなるはずだとかいう議論が行われています。しかし、町内会というのは、日本の地域社会の変動の過程で非常に変化してきたものではないか。変化の過程の、ある断面をとって、これが町内会というものの本質であるとか、こういうものが町内会なのだという議論をしてしまうと、非常に大きな間違いをおかすことになるのではないだろうか。こういう歴史的な存在については、ある種の発生論的なアプローチと申しますか、どういうわけでこうなっているのか、もう少し前はどうかであったのか、本来どんなものであったのか、こういう発想が必要なのではないか。そういう意味で、レポートの半分ぐらいは、町内会というものが本来どんなものであったと考えたらいいだろうか——加太先生あたりに、それは違うとお叱りをいただくかもしれませんが——私の理解している限りでは、こんなものであったと考えるべきではなからうかということを書いたわけです。

「町内」の活動機関が「町内会」だ

倉沢 2～3のポイントを申し上げると、一つは、町内会という団体だけを取り出して議論しては間違いになるのではないか。ある種の社会的な単位、あるいは文化的な単位、ある種の規範的な単位として「町内」というものがある、その町内が年齢階梯的に組織されていて、それぞれの年齢階梯に対応した集団あるいは組織をもっている。現在では、婦人会と呼ばれて



青井 和夫氏

いる“おなごしゅ”といったようなもの、あるいは“若い衆”と呼ばれてきたような、ある一時期には「青年団」という形をとってきた組織等々含めまして、町内というある種の社会的な単位の中で、いわば執行責任を負った中心的な団体として町内会がある。そして、世帯の長である人間を、実際に出てくるメンバーとしてもっている。一種の町内のエージェントとしての町内会ということが、一ついえるのではないかということ。

そして、全体としての町内というのは何のためにあるかといえ、行政組織を含め、今日のようなさまざまな専門的な諸サービスが成立する以前に、都市生活者が自分たちの問題を解決していくための、日常的、非日常的な危機を切り抜けるための相互扶助の組織として、町内というものがあつた、というふうに考えてよろしいのではないだろうか。私は、幾らかその部分を強調しましたが、それを支えるためには、逆にいえば、日常的あるいは非日常的な親睦の機会を用意するかといったような——これは青井先生のご専門であります——T. パーソンのAGIL理論^(注1)でのAGだけではなくてIL領域というものが当然ついてくるわけですけれども、それにしても、中核的には危機突破の組織としてあつたというふうに考えるべきではないだろうか。



倉沢 進氏

町内会は世帯主をメンバーとする自動加入の自治的な単位だ

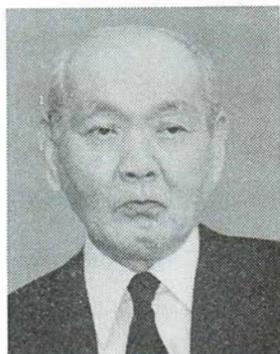
倉沢 それから、組織原理がしばしば議論されております。強制ないしは自動加入——私は自動加入というべきだと考えているわけですが——とか、世帯が単位になって加入しているとか、機能が包括的であるとか、保守支配の基盤になる等々のことが、これまで指摘されています。それはそれなりに間違いではないけれど

も、さきほど申したように、世帯が単位というよりも、むしろ、町内という単位の中の世帯主が構成メンバーとなるような組織として町内会があり、背後には町内というもっと大きな単位がある、というふうに考えるべきではないかということ。もう1点は、町内会というものが一つの地域に一つしかない。この特徴はほとんどの人が触れていないというふうにレポートには書きましたが、近江哲男さんが、一言どこかで触れているはずで。これは、いってみれば、国家とか自治体とかいうものが、一つの領域と、構成している国民とかメンバーをもっているのと、かなり似通った原理をもっているのではないかということですね。そういう意味で、包括的な機能をもつというのは、それが伝統的な封建的な性質であるとか、そういう議論をする以前に、むしろ自治的な単位——自治体があらゆる機能の中に含んでいるのと同じような意味合いをもっていたというふうに理解すべきではないだろうかということです。

昔の「町内」は全員加入の集団ではなかった。それが全員加入となり、行政補完的なものに変質したのだ

倉沢 そして、このような組織上の特色をもった町内というものが、明治以降、さまざまな社会変動の中で、それ自身も、その変動に対応する過

程でさまざまな変化をたどってきた。ことに、町内会の場合に議論される、いわゆる国家統制といえますか、銃後体制のための町内会、隣組の組織化という波をかぶっておりますが、その過程で、たとえば、これまでは必ずしもその地域に住む全員が加入するものではなかった、ある有資格者だけの集団であったものが、すべての住民を中に取り込むような形になってきたとか、さまざまな変化をたどってきている。なか



加太 こうじ氏

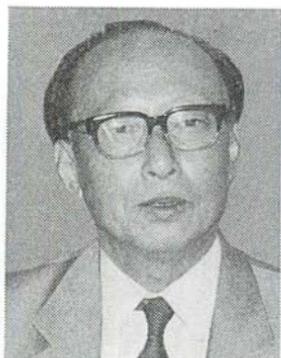
んづく、町内という、これまで自主的な、住民の共通、共同の問題の解決のための組織として働いてきたものが、明治以降の地方行政と申しますか、そういう制度が確立する過程で、いわばその機能の中核部分が行政側に吸い上げられてしまって、残された、どちらかといえば主要でない機能、行政補完機能とか、圧力陳情機能であるとかいったものが、むしろ中心的な機能であるかのごとく町内会が変質をしてきたと考えるべきではなからうかということでもあります。

この変質の結果として——と私は理解するわけですが——町内ないしは町内会という組織が、どちらかという、多くの住民からすれば、魅力に乏しい集団になり下がってしまったということを感じるわけです。したがって、最初に申し上げたように、現状から、町内会というのはいくつものだというふうに議論するのは、間違った解釈になるのではないか、ということをお願いしたかったわけです。

ここまでは、町内会のこれまで論ということになるかと思えます。

町内会の存在は日本文化の特徴の一つか？

倉沢 これから論と申しますか、コミュニティの形成にとって町内会がどういう役割を果たすかという問題についても、若干議論いたしました。



越智 昇氏

これについては、越智先生あたりからお叱りがあるのかもしれませんが、じつは私自身も、このところは非常に迷って、わからないところであって、きょうお見えの先生方にいろいろ教えていただきたい点がございます。

歴史的には、かりにいま申し上げたようなことがあったとしても、少なくとも現在の私どもも、やはり地域の住民を代表する組織として町内会が存在しているということ、存在すべきであるという、一種の正当性を認めているということがいえるのではないだろうか。それを称して——近江さん流に言えば——日本の文化的な特徴の一つだということになろうかと思えます。

町内会のプラスの点

倉沢 それに対して——こんどは日下部先生に叱られることになるかもしれませんが——いわゆる西欧先進諸国の社会というものは、そのような集団をもたなかった、もっていない、そして、それとは違ったボランタリスティック（自発的）なさまざまな諸集団というものがあって、これがコミュニティを支えている。わが国の場合にも、コミュニティの形成というものが一種の社会目標として問題提起をされて、ある人は、もっとボランタリスティックな集団がたくさん出てこなければおかしいではないかという議論をしている。ある人は、日本人にとってみれば、そういうものはなじみのないものであって、町内会を強化することが、日本の社会にコミュニティ的なものを育てていく方法論として、正しいのではないかという議論がなされている。

私の理解を申し上げますと、町内というシステムがもっている長所も認めるべきではないか。ここにもちらっと書いたかと思うのですが、少なくとも

も、西欧の社会はそういうものがないことによって、たとえば危機突破ということについて、日本の社会よりむしろ脆弱な側面も、ある意味ではもっているということがいえるのではないだろうか。



日下部 禧代子氏

町内会のマイナスの点

倉沢 他面、それでは町内会が日本のコミュニティ形成の基盤になるか、ということといわれると、たぶん二つ問題点があるだろう。一つは、本質的な問題点として、あらゆる諸活動を町内というものの中に取り込んでしまうという行動様式をもって、共同募金のお話を例に書いたかと思いますが、自発性、自主性といった要素を極端に抑え込んでしまう。このシステムが今後の日本のコミュニティ形成にとって、むしろマイナスの条件に働くのかもしれない。この点に一つの問題があるだろう。

もう一点は、さきほど申した歴史的な変質の過程で、町内会それ自身の活力が非常に低下をしてきている。一般に、町内会に対して拒否反応をする人々がいるということも一つでありますし、現在の町内会の参加者が、じつは90%にも達していながら、参加意識をもっている人は、2~3割しかいないという現実もございますし、参加意識をもって参加したり、役員をしたりしている人たちが、高齢化したり、あるいは非常に行政依存的な方々しか参加をしていないとか、これは、歴史的な過程として考えると非常に同情するわけなのですけれども、現実には認めざるを得ない。新しい問題に取り組んだり、対応したり、組織したりしていく能力に乏しいリーダー層によって構成されているのが現状である。そうだとすると、町内会を基盤にしてやるのが、いわば戦略的にマイナスなのかもしれないという問題もあるのではないかと。本質的な問題と派生的な問題と両方あって、こ

ここに疑問が出されるということがあろうかと思えます。

町内会と自発的結社との競争的共存が不可欠

倉沢 ただし、それでは町内会をのけものにして、これからのコミュニティ形成に、西欧社会のようなボランタリスティックな集団が、どんどん出てくる状況にあるかということになりますと、東京や横浜ですら必ずしもそうではないし、いわんや地方都市に行くと、地域で集団形成するといえば、町内会系の集団しかあり得ないというような地域も、非常に多いわけです。

そこで、越智先生の「町内会の文化変動」という論点の一つ出てくるのだらうと思います。ボランタリー・アソシエーション（自発的結社）が活発に活動することをきっかけとして、町内会それ自身が変質をするのではないか。こういう論点で、私も、それにはかなりの点で共鳴するところがあります。町内会のある種の変質、そして、それに対してボランタリー・アソシエーションが果たす役割、あるいは、現在さまざまなレベルで進められている社会目標としてのコミュニティ形成の努力、こういったものがプラスに働けば、一つの可能性が出てくるのではないだらうか。

清水市の「飯田をたがやす会」

倉沢 一つの例として、清水市の「飯田をたがやす会」をレポートでは申し上げたわけですが、この場合には、一種のボランタリー・アソシエーションと町内会との競争的共存と申しますが、その過程で、町内会自身の変質を余儀なくされ、あるいは、それ自身がむしろ望ましい変質の過程をたどっている——こういう見方も出てくるのではないだらうか。その意味では、全面的に町内会に依存して、これをテコ入れすれば日本の地域社会はコミュニティ形成ができるのだ、という議論にも私は疑問をもつわけですし、他面、町内会を封建的で古いものとして切り捨てて、西欧型の地域

社会ができていくという議論も、日本の現実を無視したものになるのではないか。その中間に、ある種の戦略が必要になってくるのではないかということが、このレポートで申し上げたかったことだということになるかと思えます。

2. 町内会の過去をふり返る

青井 全体を理路整然とおまとめいただきましてありがとうございました。

かなり古いところから、町内の歴史ということにも触れておられました。全体として、たとえば東京の場合は関東大震災が一つの大きなエポックになったことは間違いないと思うのです。それから、戦時体制にはいるにつれて、いろいろな形で組織化が進展することによって、一挙にそれが広がったということも否定できないと思うのですが、あまり古いところは無理としても、たとえば関東大震災の前の、明治の状況だとか、あるいは徳川時代までさかのぼってもけっこうですが、現在の町内会が東京全域に広がる前の状態はどんなものであったのか、われわれ実感としてつかめないのですけれども、加太先生いかがでございましょうか。

江戸時代はどうだったのか？

加太 徳川時代といっても270年もありますから、その後半くらいになると、町内での自主的な組織は、脱都会、講中をつくって神社にお参りに行くなんていって、安芸の宮島を参拝に行くとか、上方見物に行くとか、そんなものしかないのです。封建社会ですから、人間は土地に縛りつけられていて、勝手によそに行って住まうわけにもいきません。上意下達はあっても、下意上達は、お上のほうが必要としなかった。ですから「目安箱」というものをつくりますけれども、これは、下意上達だと称しながら、じ

つは、江戸時代中期以後に町人の力が強くなるので、町人の不満をごまかすために、おまえらのいっていることを取り上げるぞと、やってみせたとすぎないので、目安箱は何も効果がなかったとされています。ですから、町奉行所でも幕府でも、町人の組織というものを必要としなかったんです。上意下達さえしていればよかったですね。「制札」といって札を立てればそれで済むこともありますし、町内に、世話役の年寄りだとか、町役人とか、名主だとか、場合によっては長屋の差配だとか、そういうのがおりますから、それから通達させればいいわけです。

上意下達の機関としての自警団

加太 明治になっても同じようなものです。関東の大震災の後に町内会ができるのは、朝鮮人が井戸に毒を投げ込むとか、日本人を襲撃するとかいうデマを軍部が流したからなんです。そのデマで4,000人もの朝鮮の人が虐殺されました。そのデマを流すために、警察が、デマを受ける団体として「自警団」というのをつくったんです。自警団をつくってみて、町内を組織でき、デマがここにうまく浸透していく、というので、支配監督する側は、折から一方では労働組合運動が盛り上がっています。しかし法律によらない、いろいろなデマを流すことによって民意の操作ができる。それで、都合よく支配するための機関として町内会をぼつぼつ作りだす。それに昭和の戦争が絡んでくるわけですね。

青井 私も少しは戦前の体験があるのですが、大体が戦時体制のさなかだったものですから、組織ができ上がってしまっておりましてね。

加太 たとえば大店で、素人芝居の練習場から、宴会をやりながら観る場所、演じる場所まで貸してくれるとか、祭りとか正月には、とびの頭が世話をやくとか、町内のことはいろいろあるんですが、組織がないわけです。組織的というのは、いまお話しした講中くらいのもんです。〇〇会なんてつくれば、いまでいえば検挙投獄。奉行所からにらまれますからね。

地方では、農民は土地を捨てて逃げることができないことに一応なっています。戸籍にない人たちはない人たちで、地域を決めて住ませたんです。支配体制がはっきり固まっていますから、自発的な組織というのは要らなかったのです。

青井 江戸と、たとえば関西の方面などというのは、いずれにしても似たりよったりのようなものですかね。

もちろん地域差はあった

加太 都市は都市、農村は農村の違いはあります。ですから、幕府支配下と、領主がいる各藩とは、農民、町人、職人などに対する支配の仕方がそれぞれ違うわけです。將軍領、旗本領なんかになると、適当にボスが出てきまして、賭博なんか盛んになってきます。しかし、薩摩藩とか土佐藩なんてところでは、農民が賭場を開いてどうこうしたら、すぐに首を斬られてしまう。ですから、博徒が発生したのは、將軍領と旗本領です。大体天保時代からです。それ以前は博徒というものはないのです。明治の自由民権運動の田代栄助が博徒だといわれているんですが、これは村内の、あのあたりの世話役です。秩父地方は生糸の産地で、冬はやることがないので、自分の家で賭博を娯楽としてさせていた。その間に民権主義者がいて、自由民権運動に秩父地方の農民が出てくるわけです。ですから、民権運動の一方には士族がいて、一方には——ほかからも来ているんですが——田代栄助関係の博徒といわれる人たちが参加しているんです。

町内会と関東大震災の関係

青井 メインレポートにも津山の話が書いてありますが、實際上、もともと町内会というのがあったのは、町人が住んでいるところだけであって、武士のところには、まったくそういう組織がなかったというようなかっこうになりますかね。

倉沢 東京の場合も、関東大震災後にできたというのは、じつは戦時中に、いまある町内会に向かって、「おまえらの町内会はいつつくったのだ」ということを調査したデータがあるんですね。考えてみますと、下町の9割は関東大震災で一応やられているわけですね。もちろん、その後にもとの住民が戻ってきたという場合もあるでしょうけれども、ある種の断絶がある。それから、郊外住宅地と呼ばれるところは、基本的には関東大震災以後に開発された住宅地、という側面をもっておりますから、その後の町内会の成立期が、ここであったということと、大震災そのものが町内会を生んだのだというふうに短絡すると、やはりこれは違うのかなという気がしまして、メインレポートが少し舌足らずだったかな、という気はしているんです。

上意下達と住民自治の関係

倉沢 いまの加太先生のお話に関係していえば、上意下達という側面と、住民の自治ということ、これが、言葉の上では別になるのですが、実態としてかなり重なる面がありはしないだろうか。レポートの中で書いたような、たとえば明治5年の学制が出る。そうしますと、町内ないしその連合体が、自分たちで学校というものをつくらなければいかんということで、お金を出し、人を出し、物を出す。そういう学校が明治期に広がったのは、事実上は政府の力はほとんど関係していないわけです。号令しただけですから。それを実現したのが、町内を中心とした住民であったとすると、確かに上意下達でもある。しかし同時に、あるときから先は住民が自主的にやっている。学校をつくれという号令が出たから、つくらなきゃならん。つくらなきゃならんということを前提とすれば、それをどうやったらいいかということ、自分たちで苦勞してやっているという側面も無視はできないのではないか。ですから、絵に書いたような自主的な自治とか、完全な専制的支配というのはあり得なくて、その中間で、いろいろな形でう

ごめいていたというふうに解釈してはどうか、と私は思うんです。

加太 たとえば、お米を安くする組織をつくろうとか、威張っている官吏を弾劾する組織をつくろうとかいうことはないのです。お上が発案したのをどう受けるかという組織なんです。ですから、結局は上意下達だと私は思うんです。

自警団は警察がつくらせたもの

青井 自警団というのがありまして、何かあったときに自分たちで守らなければいけないのだ、だれも守ってくれないのだという場合には、力を出すわけですね。

加太 関東の大震災のときには、東京では各警察がつくらせたのですから、自警団は2日からできるんです。その自警団に対して、朝鮮人が暴動を起こす、井戸に毒を投げ込む、といったようなデマを流していくわけです。そうすると自警団は興奮して、たとえば上野のあたりでは、朝鮮の人をつかまえて、柱の焼けぼっくりにしばりつける。「アイゴー、アイゴー」といっているのを、高台から、燃えている上野駅に投げ込むんですから。私のいたところでも、秋田から来た人で、朝鮮人と間違われて、日本刀で斬られた人がいます。なまりがひどくて、顔にあばたがあった。ほんとうはお医者さんなのですが、うしろから斬られた。そこへ、患者として行った人が、「あっ、高田先生っ」ってわけで、自分の家が外科医だったものですから、近所だから運び込まれて助かったんです。すると警察では、そのことを絶対にどこにもいわないように、といって、太平洋戦争が終わるまで、だれもいわなかったんです。私の家は高田医院の隣ですから、よく知ってるんですよ。自警団というのは警察がつくらせたんです。

青井 私が東京に出てきたのは昭和14年でした。戦時体制のまっただ中ですから、感じから申しますと、いろいろな組織がきちっとできてしまっていて、完全に上意下達だったと思います。

加太 最初は昭和8年にできた「警防団」です。これが「隣組防火群」というのにだんだんと成長していくんです。

物資配給と国債割り当て

青井 戦時体制になりますと、防空演習だとか、それから物資の配給がありますね。隣組にはいないと、どうにもなりませんし。

加太 配給に対する不満などをいえば検挙投獄ですから、「きょうは肉の配給がある」とかいった情報がくるだけです。ところが、牛肉だか、鳥肉だか、豚肉だか、馬肉だか、羊肉だかわからないので、それで「お肉」という言葉が生まれたんです。それまでは「お肉」という言葉はないんです。肉に「お」をつけるんなら、ハンバーグステーキも「お」をつけたらいいだろうなんて、私らいったものです。「おハンバーグステーキ」って試してみろってね。戦争中にできた言葉が「お肉」です。

それから、国債の割り当てで、割り当てる側は、平等に平等にというんです。そうすると、大工の女房は「おかみさん」、官吏の女房は「奥様」、会社員の女房は「奥さん」じゃぐあいが悪いってんで、「奥様」なら「奥様」で全部呼ぶようになった。大工の女房がきのうまで「おかみさん」といわれ、「ちょいと、おまえさん」なんていっていたのが、「奥様」なんていわれると、自分のこととは思わないから、返事しなかったというんですから……。それが昭和15年ごろからです。

青井 越智先生は、町内会の思い出としては戦後になりますか。

越智 私はこれでも年がいておりますので、戦時中の体験はありますよ。戦争中、四国のほうですが、父親は出征中、母親は病気、弟たちは小さい。1世帯から1人は出なければいけないというので、私は中学校から帰って、かばんを放り出して、制服のままで町内会に参加しました。もちろんこわかったです。そのほか、防空演習でもなんでも、学校は優先しますが、放課後は必ず参加いたしました。

村から町への変貌過程——横浜の例

越智 いま、加太先生の、生き字引のようなお話を興味深く承ったのですが、私も一言いわせていただきます。

さきほど倉沢先生のご要約の中でも、町内という社会文化的な基盤というものを重視しなければいけない、そこにおいての、ある組織が町内会である、こういう見方をすべきだというのは、私も全面的に賛成です。その点でおもしろい例がございます。私は横浜に住んでおりますが、横浜というのは、もとは農漁村でしたね。それが急速に、大都市に変貌してまいります。

ところで、私はつい誤解をしていました。連合町内会というのは、単位町内会が寄り集まって、行政指導のもとで連合組織をつくっているのだと思っておりました。ところが、横浜でも古いところに属する中心に近い住宅地域ですが、そこでは、連合というものが、もともと一つの部落だった。ですから、家が建ち並ばない前から、ある連合町内会の組織が、じつはその社会文化的な統合体であるし、暮らし方であったわけです。そこがスプロール化して住宅ができて、いまではすき間もないほど家が建ち並んでしまったわけです。したがって、町内会は1丁目、2丁目、3丁目できて、単位町内会はたくさんに分かれました。でもやはり、その地域のことを話し合ったり、行事を営むときには、昔からの町のあり方ということを中心にして、いろいろ活動が行われます。また、それを尊重しない限り、そこではうまくいかないわけです。実際、古い方がたが威張るという意味でのまとめ役ではありませんで、理解者としてたいへんいいリードをしてくれるから、むしろうまくいっているといつてもよろしいのです。その地域に行ってみると、この道路からこの道路までは何丁目の町内会、のはずなんです。その道路をはみ出した向かい側の数軒が、こちら側の町内会にはいつているんです。なんでこんないびつなこうになっているのかと聞きますと、これは昔からのご近所づきあいだから、いま別の町内にな

るというのは不自然だ。こういうことで、それが当然のこのように認められるのです。というのは、倉沢先生がおっしゃるように、村から町へ変化してきたときの町内というものの意味、それがいまでも——農村は何も残っていないのですが——生きている。この部分が、考えられねばなるまいと思っております。

自衛組織としての衛生組合

倉沢 もう1点は、その町内が生活を守る自衛組織だということは、横浜の町内会の歴史に関しても非常に重要な指摘だと思います。明治期の横浜は開港場、外国人居留地区を中心に、急速に都市化しました。そういう市街地区には町内会はなかったのですが、町内が伝染病に対する自衛活動をせざるをえないという事情から、町内ごとに衛生組合が組織され、行政主導のもとに町内ぐるみで、危機突破活動がなされたわけです。これが、町の中心部からだんだん郊外地域にまで広がりました。もう少し説明しますと、横浜というのはああい開港場になったわけですが、当時は不平等条約下で、外国の船が入港し、船員が上陸するさいには、十分な検疫体制をとるだけの条件がなかった。そのために、伝染病がもちこまれて、たいへんだったようです。伝染病から市民生活を守るためには、町のすみからすみまで清潔にし消毒しなければなりません。どの家も一斉に畳をひっくり返して床下掃除をし、石灰をまくことを町内ごとに徹底させたものでした。町内の衛生組合長というのが、のちの町内会長に当たるんですが、非常に強力でした。駐在のお巡りさんといっしょに、町内の家を1軒1軒検査してまわるんです。ですから、古老の方は、その検査が恐ろしかったと回想しています。家の戸を開けてズカズカとはいってきまして、パッと畳を上げる。床下が不潔だとお目玉を食らうわけです。

そういう状態の中で、自分の町をそれぞれ守らなければいけない。これが最初だったろうと思います。そのことと、部落的出発ということ。こう

いう意味で、町内の社会文化的体制とでもいいますか、そうした発生論的考察を抜きにして、町内会組織だけを問題にするというのは、間違いだということがよくわかりました。

青井 かなり前からの歴史的ないきさつみたいなものがあるわけですね。そうすると、町によって少しずつ性格が違うかもしれません。とくに横浜のような場合には、さきほどお話しになったようなのが、中心になるかもわかりませんし、連合町内会なんていったら、さかのぼれば、もとの部落会ですね。そこに新しい連中が、どんどんはいり込んでくるといったようなかっこうになるわけですね。

戦後の占領軍の禁止令

越智 戦中にかなり画一化が行われ、戦後に、名称は変わっても、もちろん継続されるんです。大方がゼロにはなっておりません。しかし、民主主義ということで、古い人たちも神通力を失ってくるという経過がございますね。さらには団地族ができてきます。

青井 戦後、マッカーサー司令部から、町内会を組織することに対して禁止令が出て、一応解散を命じられますね。ところが実際にはなくなると困るので、そのまま温存されていたわけです。

倉沢 大阪あたりですと、「日赤奉仕団」という名称で町内会が生き延びるわけです。場所によっては「衛生組合」の形で残ったところもあったかと思えます。

越智 それから「親睦会」だとか、「農協におんぶした形のもの」もあります。

倉沢 婦人会が町内会機能を代替するとか……。ですから武蔵野市などのような例外的なところを除けば、何らかの形で必ず生きていたということですね。役所が、公式には手を触れられないけれども、どうしても必要だということでやったのは、囑託員とか、行政連絡員など、つまり広報を配

布する人などを委嘱するわけですが、委嘱される人は町内会長です。町内会長であるがゆえに委嘱した、とはいわないわけです。この地域のことをよく知っている人として委嘱した、と。しかし、実態としては町内会長である人たちが、行政囑託員とか連絡員とかいう役割をもっている。したがって、結果的には、マッカーサー禁止令下でも、事実上、町内会は存続していたということはいえるんでしょうね。

青井 形の上では、いったんピリオドを打たれたかっこうには、なっていましたけれどもね。

戦後の生活危機と町内会

倉沢 マッカーサーという人は、たいへん要領のいい人ではなかったかと思うんです。昭和22年になって禁止するわけですね。20年から22年の間は利用していました。よた話をすると、英語で牛肉のことをビーフという、牛という言葉とほとんど関係のない言葉が使われている。あれはなぜか——。牛という言葉はアングロサクソン系の言葉。オックスとかカウとかいいますね。そして、ビーフというのはフランス語系の言葉である。フランス系の貴族は、牛肉がテーブルに載ったのを食べる人なので、牛肉という言葉はフランス語系で、彼らが食べる牛を飼っていたのはアングロサクソン系の人たちである、したがって、牛という言葉が残っている——ということを前に聞いたのです。それに引きつけて申しますと、私は、まず先に覚えたことは、牛肉でもハンバーグでもなく、ヘットとラードなんですね。進駐軍の軍用食料の余りのヘットとかラードを、ラベルのついていない灯油缶みたいな缶詰で配ってきまして、私共は鍋とかどんぶりを持って、配給を受けに行くわけです。町内会長はうやうやしく、おまえのところは4人家族だからこれだけだと、秤にかけて、ヘットとラードを配ってくれる。最もおいしかったのはコンビーフでしたけれども、そういうことを思い出します。配給を絶対にしなければいけないとか、そういう危機状

況があると活用される。逆に、現状ではそういう必要がないので、弱体化し、眠っているということがある。危機状況が発生したときに——さきほどの加太先生のおっしゃった自警団もそうですが——はじめて機能を発揮して、ふだんは眠っている組織というものが、あるんじゃないかというふうに思うんですね。それで、危機突破ということが、町内ということの非常に重要な基盤ではないかと思うんです。

3. イギリスに町内会はない

ドーア教授の『都市の日本人』

青井 ちょうどそのころ、ロンドン大学（現在はサセックス大学）のドーア教授が日本に来ましてね。私も大学院生で、『都市の日本人』^(注2)に出ていた調査をやったときに部分的ですが参加したんです。ドーアさんがいうには、イギリスから来ていちばんびっくりしたのは、東京には町内会というのがちゃんとあって、いろいろな活躍をしているという点だったようです。とくに農村から都市に流入してくる人がはじめて東京に居を構え、あるいは下宿をすると、町内会長は、ここはこういう慣習になっているんだ、来た人間はこうしなければいけないだと指導する。そこで再教育をされるので、田舎から出て来た人も混乱することなく都会の生活にうまく溶け込んでいけるというんですね。彼は西谷さんというおばさんの処で下宿していたのですが、西谷さんがドーアさんをかなりきびしくしつけていましたね。人に会った時はこのように挨拶しなければいけないとか、ごはんの上にみそ汁をかけて食べるのは不作法だとか。また町内の人とのつきあい方も一通り教えていました。ドーアさんも町内会の寄り合いには必ず参加して、町内会の活動状況や住民の不平不満もよく聞いてまわりましたし、町内会長さんもいろいろのことを詳しく説明していたようです。

ある重要会議の際などでは、いつ会議の決定がなされたのか、彼には分

らなかったようです。というのは、いつまでたっても世間話や雑談ばかりで、決をとったこともなければ、反対でもめたこともなかったからです。それにもかかわらず、知らないうちに町内会の総会は終わっていたので、彼は目を白黒させていました。

とにかく、ドーアさんが町内会のことをよく研究していたことは、『都市の日本人』を読んでごらんになると、よくわかると思います。とくに面白い点は、われわれ日本人が当然だと思っている点に疑問を持ち、われわれが、なんでもないと見逃していたところを、くわしく説明している点だろうと思います。

ロンドンの場合には町内会のような組織はない、と彼がいうものですから、ロンドンではどうしているのだろうかと思っていたんですが、日下部先生、いかがでしょうか。日本の町内会が果たしているような機能を、向こうでは、どういうぐあいに処理しているのでしょうか？

町内会のような行政下請け組織はない

日下部 町内会というのは世帯主がはいるということで、現在でも父が世帯主でございますから、私の場合、自分が経験的に存じませんで、父や母から聞くという形でしか、町内会はわかりません。町内会とはどういうものかと、理論的な形で知ろうということから推察したイメージしか、もっておりませんが、それとイギリスの場合を比較してみますと、町内会的なものはイギリスにはない、ということがいえるのじゃないかと思います。町内会的と、いま私が申しましたのは、行政の末端組織というとおかしいのですが、行政のお手伝いを下請け的にするというふうなこと、また、自動的にしろ強制的にしろ、そこに住んだがゆえに、その組織にはいるということは、イギリスでは考えられません。なんらかの形の自発性というのがそこになれば、その会に自分がはいることはないのじゃないか。この辺のところ、日本の町内会と違うんじゃないかと思います。

教会の意味が大きい

日下部 日本でいう町内会のもう一つのイメージは相互扶助ということですね。この相互扶助という点では、イギリスの場合には、自発的にボランティアな集団ができて、そこでお互いに相互扶助をやるという形です。そして、日本と違う相互扶助の拠点になるのが教会です。病院などの場合でも、イギリスの場合は教会からスタートしていくという形で、お医者様は無給でボランティアに奉仕活動をしたというのが、イギリスの医療の最初です。ですから、教会の存在というものは、歴史的に見て、そして現在に至るまで、大きな意味をもっているのじゃないかなという気がいたします。現在、民間の福祉サービスの中核、あるいはパイオニア的な活動をするのも教会なんです。日本の場合には、行政での町内という形になりますね。向こうでは、教会を単位にした「パリッシュ(教区)」というのがございますから、その辺のところ、目立った意味での違いじゃないかなというふうにとらえておりますけれども。

青井 確かに、教会というものが中心にありますね。そこには戸籍簿もある。ただ、教会の場合にわれわれ疑問に思うのは、イギリスの場合は、まだアングリカン・チャーチでかなり統一されているとしましても、大陸のほうに行くと、プロテスタントあり、カソリックあり、同じプロテスタントでも、さまざまなセクト(教派)がある。その結果、同じ地域の全員が同じ教会に所属しているわけじゃなくて、違った教会にバラバラに所属していますね。教会が、そこをどういっしょに埋めているのかというのが、一つ問題になると思うんですが。

任意加入を尊ぶイギリス人

日下部 日本は、全部はいるということでない気が済まないのだと思いますが、そうではなくて、自発的にということだから、落ちこぼれはあるかもわからないけれども、気が済まないのではなくて、それもそれだろ

うという考え方があります。教会だってまったく任意ですから、教会に来ない人は、来ない人でいいわけです。トライはするかもしれませんが、その方が「ノー」だといえば、教会に行く義務も何もない。その辺のところが日本との違いです。日本の場合、明治以降中央集権という政治のスタイルをとっていますし、行政区は権力を全体に行き渡らすという目的があったと思うんです。治安維持的な側面もあり、そのとこできちっと統一してしまわないと気が済まないというところもあったんじゃないかなという気がするんです。イギリスでも中世における、たとえば商人たちの同業者組合——ギルドなどは、非常にきちとした形で一つの集団を形成していたと思います。また、ボランティアの集団としては「フレンドリー・ソサエティ(共済組合、相互扶助会)」という、ベバリッジが非常に評価した^(注3)ものも存在しました。しかし、皆さん全部おはいりなさい、ということではなくて、自発的ということだったと思います。その辺のところが、政治の体制の違いとも絡んで、今日の地域社会の中に形成されていく集団の日本とイギリスとの違いになってきているのじゃないかなと思うんです。

日本でもお宮とお寺は非常にちがう

加太 鎮守の神社というのは、米を取り上げる組織なんです。だから、税金の代わりに年貢を取っていくための、上からの組織の、村ごとのよりどころが鎮守だったんです。これに対して、仏教のほうの寺院は、米を取る組織ではございませんから、農民たちが集まってくる、農民一揆の集会所になっている場合が往々にしてあるわけですね。いちばん大きいのは織田信長に対する一向一揆です。ですから、宗教と結んでの地域組織は、日本でも鎌倉時代には確立されてくる。それが、支配する側とされる側と、神社と寺院をそれぞれ使い分けてくるんです。秩父の困民党の暴動の集合場所は神社だった。ここにみんな集まりまして、警察とか役所とかを襲撃するわけです。神社や寺院は、民衆の集合場所を、時代によって兼ねてい

くわけです。

青井 同じ宗教とはいいいながら、お宮とお寺が違いますし、向こうの教会もかなり違った性格をもっていますね。

加太 南アフリカあたりでイギリスが差別しますね。そうすると反対運動をやる。これは教会ですからね。それから、アメリカでの反核運動があって、反核けしからんといって、教会に集まった人たちは200~300人検挙されているんです。ついこの間のことです。ですから、ヨーロッパ、アメリカでは——アフリカもそうですが——いまでもそういうふうに使うわけです。日本は、国家神道ができて以後、そういう機能を、神社は失ってしまったし、寺院も失ってしまったのです。

青井 仏教の場合は、檀那寺というのも、政治統制の中に完全に入れられますからね。

加太 そうです。だから自由民権の困民党は神社に集まるんですね。

青井 ですから、かつての土一揆とか一向一揆だとかは、お寺を中心に徹底的に戦いますけれども、そういうものが弾圧されてしまったあとは、寄るべがなくて、完全に政治権力によって統一されるというかっこうになるわけですかね。

加太 明治の初期に、神仏分離して国家神道が起こると、神社は、秩父困民党の集会場になったような機能をだんだん失っていくんです。

青井 向こうのボランティア・アソシエーション（自発的結社）と教会の活動とは、切っても切れないものがあるんだろうと思うんですが……。

地域に弱かった日本人も変わりつつある

加太 話は別なんですけど、私たちなんかは、町会というものに対して、幾らの金でもないから、近所隣の人と仲が悪くなくてもしょうがないから、隣の人が役員をやっているのなら町会費をおさめておこうじゃないかという程度のつきあいですね。サラリーマンの多くは大体そういう形なん

です。特別な人たちだけが町内会に対して熱心で、大方は善意の人です。ですから、周りの人もあまり反対しない。なぜこうなったのかというと、日本で、農民もそうですが、都会では物をつくる人間の中心が職人だったころは、職人は地域からでなければ仕事をもらえないのです。たとえば浅草の大工が新宿のほうに行きたくてやるということはほとんどない。浅草の大工は、下谷、浅草といわれている上野、浅草界隈での仕事です。雑司ヶ谷の左官は雑司ヶ谷界隈ばかりだったので、昭和初期に説教強盗が活躍したころ、雑司ヶ谷に来て左官の親方についたというので、それじゃあとというので、あのあたりシラミつぶしに手配していきます。それほど地域社会に依存して職人は収入を得ていたから、お祭りなんかあると、ふだん世話になっているからお礼だというので、職人たちが先頭に立ってお祭りをやったわけです。どの町内の催しも、昭和30年ごろまでは職人が先頭に立ったものです。一方、職人とともに地域社会に世話になっているものに中小商店があるわけです。デパートは遠いところから買いに来ますが、そこら辺の酒屋さんは近所の方だけです。ですから、祭りその他、スイカ割りでもなんでもそうですが、町内の行事の先頭に立つのは、まず職人、それから商人だった。ところがいまは、職人が各地域から減ってしまった。そして、職人の多くは、〇〇会社木工部だとか、塗装部としてやっている。あるいは建築会社の専属だったりして、地域社会に頼まなくても仕事はもらえるんです。仕事自体も、新宿の大工さんがバイクに乗って千葉県の方まで仕事をしに行くなんて例はたくさんあるんです。ですから、職人が地域社会に熱心でなくなる。職人そのものの数が減っていく。そして、また、サラリーマンは地域社会にいても、会社とうまくいってればいいのだと思っている。お祭りでも、会社の創立記念日だなんていうと、何をさておいても駆けつけます。ところが、町内のお祭りは、そんなものはどうでもいいや、近所とのつきあいがあるから、最低の寄付でもしておいてやれ、なんてことでお茶を濁している。いま、地域社会での組織とか行事な

どの先頭に立っているのは中小商人です。そのほか、物好きな方はたくさんいますから、町内の世話役をやりたがって、お祭りになると、鉢巻きをして、特別仕立ての祭りの衣装までつくっている人もいますが、こういうのは趣味、道楽ですね。

多民族国家オーストラリアでは？

越智 私、メルボルンに行っていたときに、向こうの大学の先生の家が郊外の住宅地区にありまして、そこに伺ったのですが、前の家はギリシャ系、うしろはドイツ系、こちらは……というように、オーストラリア人はどこにもいないんですね。郊外の住宅地区はいろいろあるでしょうけれども、そこはたまたま相当大きな地域なのですが、いろいろな人が寄ってきている。彼らの習慣というのがおもしろいんです。オーストラリアでは、どこのご家庭でもバーベキューをやるようですが、自分の家族だけではなく、何軒かの家を順番に回って、何家族かでやるんです。私がアポイントをとろうと思ったら、その日はバーベキューの日だからだめだというわけです。車に奥さんも子供も乗せて、出かけてしまう。そこでは相当に手の込んだことをやるようです。日本だったら、ホスト・ファミリーの奥さんがもっぱらサービスしますが、向こうはそうではなくて、男の人たちが、材料の支度からサービスまで、一切をやる。女性や子供は、おしゃべりをし、食べるほうに回る。後片づけも同様に男性がやるのです。「じつはあれは好きではないんだ」といって、私にこぼしていたプロフェッサーがおりましたが、それでもやらなければいけない。そういうことを繰り返しやることによって、お互いに孤独な人たちが、何かのときに助け合うことがあるそうです。ギリシャ人とドイツ人とイギリス人とが話し合ったり、連絡し合ったりする。ヨーロッパ系社会でも、地域生活上の相互安全保障のために、こうした家族づきあいがやられているようですね。

日英比較——実にさまざまなクラブがある

越智 それと関係があると思うのですが、青井先生がお訳しになったドーアさんの本を拝見しましたら、ドーアさんは、東京の池の端の調査をなさったのですが、注の部分で、できたら、イギリスでも町内会を学びたい、という言葉がございましたね。というのは、ドーアさんの価値観には、イギリスで、もう一つ何か足りないところがある。それは、日本の町内会から何もかも学ぶという意味ではないかもしれないけれども、ある種の側面を学びたいというふうなことを思っていたのではないか。そこいら辺をひとつお教えいただけるとありがたいと思います。

それに関連して、どなたの本だったか、ロンドンでの社会構造を書いたものでしたが、その中で、たくさんのクラブが活動している状況を詳しく調査された論文を読みました。教会区でということはよく聞くことで、いまも教えていただいたわけですが、都市の場合、クラブがどういうきっかけで発生するのか。やっぱり教会の教区でのきっかけで発生するのか、それともそうでない何かで発生するのか。そこら辺を日下部先生にご指導いただけたらありがたいと思うんですが。

日下部 イギリスでは労働組合も業種別になっていて、日本のように〇〇会社の労働組合とはいいいません。一方、労働者階級ではなくて、プロフェッショナルなほうの、管理職の方たちのクラブというのは職業別にございまして、お昼なんかは、そこに行って食事をなさったりするわけです。私はたまたま、そういう方のひとりに日本語を教えていましたので、その方に日本語を教えるときには、そこでお食事を一緒にという形でやっておりました。なごやかで、リラックスできる、ほんとうにいい雰囲気をもっているクラブでした。そのほか、趣味やスポーツのクラブがございませう。また、さまざまなボランティアの集まりや婦人団体のクラブ、それから青少年のクラブがあります。日本の場合、青少年というのは、大体において学校単位でいろいろな行動をやると思うのですが、イギリスの場合

は、地域の単位で青少年のいろいろなクラブがございますし、ご老人はご老人のいろいろなクラブがあります。労働者階層のご老人はデー・センターというところにいらして、それを一つのクラブにしているけれども、同時に、自分自身の趣味で、また別のクラブにもたくさんはいていらっしゃるんですね。おひとりで幾つかにはいていらっしゃる。その辺のところは日本との違いの一つかもしれないと思うんです。非常に重層的と申しますか、これだけのクラブ員であるというふうに、一つだけではなくて、こちらにもこちらにもはいる。そして政治のクラブもある。ですから、クラブに属することによって幾つかの自分自身を発見もするし、いろいろな自分自身を發揮もできる。そういう形で、クラブというものが非常に大きな意味をもっているんじゃないかと思えます。青少年のクラブもバラエティにとんでいます。ですから、日本のように、カギっ子だとか、学童保育という形でしか、下校してからの時間を過ごせないということではなくて、スポーツのクラブとか、どれかのクラブにはいています。それは日本との大きな違いじゃないかなと感じたわけです。

クラブに入るきっかけは何か？

越智 きっかけをつくるのはどういうチャンスなんでしょう。まさか行政からではないでしょうし、日本だったら町内会からという、それでもないでしょうし、学校ででしょうか。それとも教会ででしょうか。いろいろあると思いますが。

日下部 教会も一つかもしれませんが、いろいろなインフォメーション、たとえば新聞というのは日本と違いまして、ローカルなニューズペーパーがものすごく発達しています。日本の場合は全国紙ですから、非常に一般的で、どの新聞を見ても同じで、クオリティペーパー（高級紙）とローカルというふうな分け方ができないような新聞の形がございますが、イギリスの場合は、クオリティペーパーとローカルとは、はっきり性

格が違っております。したがって、一般の人たちが読むのはローカルの新聞なんですね。ロンドンの中でもローカルがありますので、ローカルというのは日本でいう「地方」じゃないんですね。たとえば私の住んでいたチェルシーならチェルシーのローカルの新聞がちゃんとありまして、それを見ると、とにかくおもしろいです。どこどこでどんなクラブの会合があるとか、そういうインフォメーションがたくさんあって、それを見て、自分も行ってみようかなと思ったりするわけです。

倉沢 チェルシーは南のほうのいい住宅地で、私は北のほうにいたのですが、そこでいうと「フィンチレー・タイムス」とか、それは「本郷新聞」くらいの規模になるんでしょうかね。

青井 それは発行部数が数百という程度になりますか？

倉沢 いえ、もっと大きいですよ。人口でいえば、万という単位になると思います。その中に、いまお話のようなさまざまな集団が、メンバーシップでいうと、大体がたぶん数十人から数百人でしょうね。そのくらいの集団がごちゃごちゃあって、発生はわからないのですが、私が経験したのでいいますと、たまたまシルバー・ジュビリーの年に私おりましたので、その祭りをやったわけです。そうしますと、地域の公園で、私が受けとめた感じでは、日本でいうと、高校の文化祭だという感じだったのですが、いまお話のようなあらゆる集団が、それぞれ一角ずつ、出店みたいなものを出して、そこで、自分たちの集団はこういうことをやっている、PRをやっている。そして、そこでお金集めをやっている。フィンチレーの女王さんがパレードすると、仮装行列をやっていて、仮装行列の小姓みたいな者が、見ている人間のところに帽子を持ってやってきて、集団活動のための寄付を集めていきます。ですから、発生的には教会かもしれないし、もっと違うのがあるかもしれませんが、はいつていく人間にとってはいろいろなチャンスがあるんじゃないでしょうか。

クラブの中心は中産階層か？

倉沢 ただ、非常にうらやましいと思った反面、逆に、たぶん彼らが日本の町内会をうらやましいと思うだろうということ。それから、私が会った人の中でも、コミュニティ・アクションの教会なんかをやっている専門職の人に町内会の話をしてもらったら、「それこそわれわれの求めていたものである」なんてことをいった人もいます。例外的ですが……。

彼らは、いまおっしゃったようないろいろな集団に重層的にはいっているのが、大体ミドル・クラスなんですね。金銭的、時間的ゆとりがあって、ある種の教養がある。そういう人たちが、非常にたくさんの集団を組織している。ほんとうのローワー・クラス、ことにコミュニティ・オーガニゼーションみたいなことを考えようとする、問題を抱えているのはローワー・クラスのわけですから、ローワー・クラスの住民の活動を引っ張り出したい。ところが、やろうとしてもなかなかできない。イギリスの場合は公営住宅が非常に多々ございますね。それがはいっている人たちのレジデンス・アソシエーションという組織——これはどういう形で組織化されたのか調べそこねているのですが——これにある種の期待をもって、そういう対応をしてほしい、いってみれば、コミュニティ・アクション側といえますか、行政側といえますか、そちらでは、活動してほしいと思っている集団がじつはあまり活動してくれない。結果的には、ボランティア・アソシエーションというのは非常に望ましいし、市民社会を支えているのだけれども、ミドル・クラスの専有物じゃないか。その辺に、イギリスのほうで考えれば問題点があって、日本の場合の町内会は——中曾根さんの暴言ではありませんが——底辺が組織されるという側面があるのかなあという気もするんですけどもね。

労働者階層のクラブの例

日下部 労働者階層の人たちにとってのクラブの一つのきっかけという

のは、私自身がそこでボランティア活動をしていたので非常によくわかります。私は、ランベスにある私立のデー・センターでもボランティア活動をやっていました。ここで非常にユニークだなと思いましたのは、行政がつくっている大きなデー・センターの場合と違って、一つのセンターを多目的に使っていることです。行政がつくったデー・センターですと、ご老人ならご老人のため、という形ですが、私の行っていたランベスのデー・センターでは、曜日と時間によりまして、若いお母さんと赤ちゃんのクラブだとか、若い両親と子供のクラブだとか、もちろんシニア・クラブとってご老人のクラブもごさいます。また、青少年のクラブだとか、妊娠中の人たちのクラブだとか、一つのセンターの中で、曜日と時間を変えて活動をやっています。だから、夜もセンターは活動を行っているわけです。シニア・クラブの人が、昼間、あるいはある曜日は、そのクラブのメンバーとして、若い人たちのボランティア活動の受け手になっている。その人が別の日には青少年のクラブでボランティアをして、青少年のクラブのお手伝いをするとか、そういった形ですね。日本では、ボランティアを「される者」「する者」と分けてありますが、そうじゃなくやっています。そういうふうに、労働者階層は労働者階層なりの一つの活動をやっていて、クリスマスときには地域の警察の音楽隊が来るとか、いろいろな人たちがやってきて、おもしろい行事を考え出しております。ですから、労働者階層は階層なりのクラブというか、地域の人たちがお互いに交流するチャンス、デー・センターが提供しているのを知ってとても感銘を受けたことでした。

青井 お話をうかがっておりますと、いろいろなネットワークみたいなものが重層構造になっているわけですね。一つ一つをとると、とても百パーセントのカバーはできない。だけれども、さまざまなものがあるものだから、それが重なると、なんとかいろいろな形でカバーしちゃうという側面があるんでしょうね。

人皆ちがうという哲学

日下部 人間はみな違うのだということを基本に置いておりますから、ここが好きなのがあるかもしれない、嫌いな人もあるかもしれない、嫌いな人は、自分の好きなものがこっち側にあるのじゃないか——というふうに、自分が選ぶのであって、上から与えられるものではない。いずれかを選択すればいいというので、バラエティにとんでいるのではないかと思います。

青井 そのかわり、なくなってしまう組織もあるでしょう。続きますか。

倉沢 消えてもいいんですね。

青井 一つの組織がずっと継続するのではなくて、ある機能を果たしてしまうと、それはもう消えていいのだ、また次のものができ上がってくるというかっこうで、いろいろな形のもが出てくるわけですね。

日下部 これを問題にして集まるとか、一つの目的のもとにできて、その目的が達成された場合には解散されていいというふうな、自由なものです。日本の場合には、終生そこに忠誠を誓わなければならないみたいな形で、これはある種の束縛になるかもしれないと思います。しかしながら、イギリスのボランティア・ソサエティというのは、長い歴史をさかのぼってみると、へえーっと驚くぐらいの、19世紀ぐらいからあるようなものがいまだに延々と続いているというのも、もう一つの側面でございますね。たとえば Family Welfare Association とかセツトルメント活動を始めた Toynbee Hall、最近、日本でも騒がれているナショナル・トラストなども19世紀に創設されています。日本は非常に浮き沈みが激しいけれども、イギリスの場合には、起源をたどると、たいへんな古い歴史があるわけです。

4. 日本とアジア諸国の比較も必要

青井 日本は最近、自動的な網羅的な組織の場合、若い世代は、とくに大都会の場合には、ひとりだけで生活できるようなシステムづくりができていましてね。だから若い連中はまったく関心がなくなる。現在のように共働きの時代になると、昼間に行くと、みんな留守なんですよ。ついこの間、私の家内が町内会の仕事をまる1年やったんですが、いつ行ってもいないし、回覧のようなものを回しても、どこかに止まってしまって、なかなか返ってこない。集金しようとしても、集まらない。とても時間がかかりましてね。

実利的・政治的・宗教的な要因の入りまじっている日本

加太 私なんかのところの町内会は、自動車の検査だとか、講習会があるとか、大掃除をいつやるとか、お祭り、スイカ割りがいつだとか、老人医療の指導者が来て、話す会がいつだとかいうことをやりますが、上意下達は、たとえば自動車の講習会とか、老人医療とか、防犯などで、下からのものは、お祭りとかスイカ割りとかいった催し物。団地なんかでも、町内会というのは大体そうですね。現在、地域組織でいちばん大きいのは、私の見たところでは生活協同組合です。これは日常の実質活動があります。町内会でも、廃品回収とか、たまには野菜の安売りなんかやるんですよ。けれども、日常的に組織して地域活動をやっているのは、いちばん大きいのは生活協同組合。それから、各宗教、これは地域ごとに助け合い組織ができていますから、自分と同じ宗教だから、あの魚屋さんに買いに行こうとか、あそこの家の子供がこうだから適当な塾に世話しようとか、そういうのが宗教ごとにいろいろ違っている。そして、仏教系では、寺院はそれにほとんど関係していなくて、在家仏教で、そのうちでも日蓮宗系が

いちばん強いです。ですから、本門仏立講、立正佼成会、創価学会、そういう形になっています。そういうもののうしろに政治があるわけです。たとえば、生活と健康を守る会は何々党系だとか、生活協同組合はどうだとかいうのがありまして、そういうものからの落ちこぼれというか、どこにもはいていないような人がいるんですよ。これが、町内会で活躍している人たちに多いです。ここへ保守政党の地方議員が、銀行と組んでコネがついていますから、町内会での旅行会なんていうと、銀行が集金して世話して、バスに乗って出かけるときは、区会議員なり都会議員なりが金一封を出す。しかし、これは保守系の議員さんに決まっているんです。

そういう仕組みの中で何がいちばん大きいかといえば、日常活動をやって活発なのは生活協同組合ですけれども、普遍的に大きいのはやはり町内会なんです。いまのところ、町内会はパッとしないようなところがあるけれども、選挙のときになるとたいへんです。

青井 その点が、メインレポートにも書いてありましたけれどもね。

中国や台湾の町内会はどうか？ フィリピンのバランガイは？

倉沢 いま、イギリスのたいへんおもしろいお話をうかがわせていただいたのですが、日本だけが特殊なのかという問題が一つあるんじゃないかという気がするわけです。中国の場合には、都市部に「居民委員会」というものがある、これが、日本の町内会をもう少し官制化し、もう少し強力にしたような働きをしているわけですね。これがどういう歴史的過程でできてきたのか、私は非常に興味があります。

もう一つは台湾です。台湾の場合、「保甲（ホコウ）」というのがあって、これがどうも、日本が組織した町内会の影響がはいているという感じなんです。

それから、これはわからないんですけども、香港をちらちらと見てみると、イギリス流コミュニティ・オーガニゼーション手法みたいなものが

はいつている。そうすると、中国の歴史的伝統は——あんな大きな国ですから地域によってももちろん違うと思いますけれども——一応、基本的には漢文化があって、それがあつる種の地域的な組織のあり方をもつていただろうと思うんですが、それに対して毛沢東主義、日本式町内会原理、それからコミュニティ・オーガニゼーション手法、そういったものがそれぞれ影響を与えて、現在、どういう違つた仕組み、そしてなおかつ、どこかに共通性があるんじゃないかということ、見ていく必要があるだろうという気がするんですね。

それから、こんどの政変で、それこそ支配機構という側面がうんと強そうだという感じがいたしますけれども、フィリピンのバラガイ（部落会、町内会）ですね。そういう種類の、西欧世界とは違つたところでの地域集団のあり方みたいなものは、われわれ不勉強で、データが不足しているのではないかという気がしています。できたら、三つの中国の比較研究をいつの日かやりたいという気がするんですけども、どなたかお調べであれば、教えていただければいいのですが。

青井 地域的、網羅的な色彩のあるものは、なにも日本だけではなくて、東アジア、あるいは東南アジアまで含めて、かなり普遍的なものじゃないでしょうか。どうなんでしょう。

倉沢 それがわからないんです。われわれは、日本のことと西欧のことは幾らか知っているわけですが、その辺のところの知識が非常に欠けているような気がします。

東アジアから東南アジアにかけての共通性

青井 1984年10月神戸で開催された第4回のアジア社会学会議で、家族と地域社会について小さなシンポジウムをやつたんです。そこで発表されたペーパーのうち4編だけが当地域社会研究所の本誌 No. 78 として翻訳出版されましたが、東アジアの地域社会は全体としてよく似ているんです

よ。もちろん父系社会と無系・双系社会^(注4)とは違いますが。

日下部 理論的根拠はございませんけれども、ヨーロッパと違う、日本も含めてアジアの中に非常に共通している町内会的なものが存在するというのは、農村、しかも米作を中心としてきたことも、無関係ではないと思うんですね。米作の場合、自分勝手にいろいろなことをやったら、たいへんなことになってしまうから、地域に住んでいる人たちは、とにかく一緒に、同じような行動をしなければ、農作業はできないわけですね。そういった意味で、ヨーロッパとは違う、一つの地域的な集団ができ上がっていて、その結束も固いのじゃないかなと思います。

青井 町内会以前の農村の部落会のときの、そして米作中心の農業形態のような場合ですね。中国はもちろん米作だけではないですけども、東アジアをとると、大体米作なんですよ。非常によく似ていますね。根が深いと思います。

日下部 水田なんか、自分のところだけ勝手に水を入れることはできませんしね。そういったものが、いまでも農村の社会にはあるわけですね。地方に講演なんかに行くと、朝、突然アナウンスメントが町内じゅうに響き渡って、びっくりして起こされることがあるんですが、有線放送が全部に行き渡るんですね。情報を画一的に流さなければならない。そしてまた、流しているということが日本はまだございますからね。そうすると、自発的に、なんていっていると、農業、ことに米作は不可能な面があるんじゃないかなと思ったんですが。

青井 水利や山の管理には村人全員にタッチしてもらわなければいけないわけですよ。

家制度の影響は？

越智 日下部先生の共通点の指摘はたいへんよくわかって、そういう面があるだろうと思うんですね。しかし、もう一つに、家制度の伝統といい

ますか、日本では非常に大きな変わり方をしてきてはいますけれども、伝統的には、家尊重、家制度というものがあるわけですし、このごろはまた“お墓ブーム”とかいって、加太先生、そう簡単に消えてしまうものではないと思いますね。

加太 消えはしませんけれども、東京、大阪、名古屋といった大都会では、結婚というのは、家と家じゃないんです。結婚式においてになるとすぐわかりますが、トップからあいさつするのは、花婿さん花嫁さんの勤務先の重役とか課長とか、とにかく上役です。家を代表するものは後ですね。いま、結婚式は会社単位みたいになっているんです。これは、ここ30年ぐらいの変わり方ですね。

越智 結婚式に関連していいますと、なるほど内実はそのように変わってきている。ところが、どのホテルを見ても、〇〇家と〇〇家という、こいつはなかなかなくなる。〇男さんと〇子さんというふうにはなっていないんですね。私も3人も子供を結婚させて、そのたびに、あいさつにくるくる回らねばならないし、事前の準備、終わりのあいさつ……。こういふことで、仲人を立てて、家と家とが結びつくというパターンがなくなっていない。若い者自身が、そうするものだと思い込んでしまっているんですね。実際には、加太先生おっしゃるように職場本位にやりますし、親のというような新婚旅行なんていうのは考えてもくれません。世界一周なんて大きいことをいっている。それは変わりましたけれども。

加太 家制度は、都会を中心に変わりだしているところなんです。全部変わってしまったというわけではないんです。農村には、家制度は非常に強く残っております。しかし、財産分与が、父親から長男へという仕組みが、太平洋戦争が終わるとすぐに、法律上壊れましたからね。これを中心にして、家制度は名誉以外になくなってしまうというようなところに移行していっているわけです。しかし、鎌倉時代からあるものが、右から左に簡単に壊れるわけではないですよ。

越智 アジアに日本の町内会的組織が多少とも共通して見られる原因は何だろうか、共通項は何だろうということを尋ねられると、家という問題をどう考えたらいいのか……確かに崩れてはきているけれども、根深いものがあると思います。

倉沢 この間、父を亡くしましたが、親戚から手紙が来たり、香典が来たりすると、どういう関係の人かわからないんですね。たいへんに困りまして、生きていうちに聞いておけばよかったと思ったわけです。いま系譜を調べているのですが、そうしますと、ある時期までは、この嫁は、どこそこの村のどこそこから来たということが示されていて、ある時期からは、どこの馬の骨かわからない結合に、変わっていくわけですね。親の代に早く出た者と、残っていた者とでずいぶん差がありますけれども、それぞれの家が、都市化過程で一種の^(注5)アプルートしまして、それが消えていきますね。ですから、越智先生の出された問題に付け加えていえば、アプルーテッドになったときに、適合した地域集団の形態はいったい何なのか。それが、もしかして、いまわれわれが西欧のボランティア・アソシエーションみたいなものを考えていて、アプルートされる前だったから、町内というシステムが日本の社会で意味をもっていたというふうに理解すべきなのか、アプルートされようがされまいが、日本人にはやっぱり町内会だというふうに考えるべきなのか、予測の問題としていちばん大きな問題じゃないかと思うんですね。

5. 町内会とボランティア・アソシエーション とを組み合わす——さまざまな提言

青井 いずれにしましても、現在、とにかく町内会的なものも少し考えなければならぬ転換期に来ている。かといって、日本の現状からいくと、ボランティア・アソシエーション（自発的結社）に全部おんぶすると

いうことも不可能である。そうすると、ある意味においては、かつての町内会的な網羅的な組織と、ボランティア・アソシエーションみたいなものをうまくミックスさせるか、あるいは対抗的に相互活性化させるか、その辺の手立てを考えねばならないと思いますが、越智先生などは長年ご研究になっていますが、日本の場合、ボランティア・アソシエーションなどができる契機はどうなんでしょう。

ボランティア・アソシエーションの発生契機

越智 近年横浜で調査した5,166団体を、創設のきっかけという点で見ると、町内会の呼びかけでできたものが最も多く、23.4%になります。それに次ぐものとして、ほんとうのボランティアな、つまり個人の呼びかけで、というのが15.7%。かなり差があるといえます。そのほか、行政企画の講座に参加した有志が自主的にグループをつくったというのが9%ほどございます。以上のように町内会がバックになったボランティア・アソシエーションが目立つといえます。

もっとも、活動内容でみますと、町内会の呼びかけがきっかけになってつくったというのは、球技が圧倒的に多いですね。野球からゲートボールまで一括して球技と呼びますと、33.3%になります。町内会の呼びかけがきっかけになってやっているのだということなら、町づくり活動や地域福祉活動、生活防衛活動、自然保護や子供の育成活動といった地域活動が盛んなはずだと思いますけれども、それは11.9%と意外に少なく、そうした活動を町内会と無関係に、個人の呼びかけでやっているという方が12.8%と、心もち多く出ております。球技以外のスポーツは12.2%もございしますので、スポーツ関係すべてということになれば、全体の半分ほどになります。これも大部分、町内会が呼びかけています。一般にいうと、スポーツや楽しみごとでのボランティア・アソシエーションは、町内会でも呼びかけて支援していますが、地域活動での多様な自主活動についての町内会

の呼びかけは少ない。というのは、そうした地域活動をやるなら、それは町内会主導ですることだという思想があるようにみえますね。でも、そこへボランティア・アソシエーションがくいこまないと、コミュニティづくりの文化摩擦は起こらない。

青井 いろいろな形のボランティア・アソシエーションが、今後できなければいけないと思いますし、それを中心にしたコミュニティづくりをどうやったらいいかということは、大問題になっているわけですね。われわれに聞かれましても、はっきり答えられないし、いろいろな発想法があると思いますが、「これだ」というのはおそらくないだろう。かつてはアメリカなど、コミュニティは非常にりっぱなものが出てきているという話だったのですが、社会移動がはげしくなり、社会生活面での自由度が広がりますと、実際にはかなり形式的なものになっている点もあると思うんです。イギリスの場合にも、社会福祉の施策を行う場合、既存のものだけでは不十分だ、という点があるんじゃないかと思うんですね。こんなことを考慮すると、いったいどういう主題に基づいてコミュニティの形成をやったらいいのか、あるいは、どういう方法で新しいコミュニティの形成をやったらいいのかという難問が最後に残されるのですが、その点、倉沢先生いかがでしょうか。

コミュニティ形成活動の手だて——自己充実型活動からはじめる

倉沢 非常にむずかしくて、試行錯誤しかないだろうと思っているわけですけれども、一つの筋道は、コミュニティ活動にはいろいろな活動がありますけれども、私は「自己充実型」の活動と、「奉仕型」の活動と、「問題解決型」の活動という三つに一応分けています。自己充実型の中に、スポーツだとか、最近はやりの学習活動など、大部分がはいっていると思うんですが、これが、いまのところ、さまざまな活動の中で量的にはいちばん多いわけです。ある意味でいちばん無難なんですね。わりと町内会から出てく

るということを越智先生がおっしゃったんですけれども、町内会というのは全員が参加していますから、だから苦情の出ない活動が、最も適した活動形態なんですね。以前、婦人会が「テレビの買い控え運動」という控え目な運動を展開して、おもしろかったんですが、婦人会のメンバーの中に、電気器具屋さんもいるので、テレビを買うなどはいえない。「少し待ちましょう」という運動にせざるを得なかった——というようなこともそうなのですが、町内会というような集団を基礎にしますと、スポーツとか学習活動とかいった「自己充実型」の活動が、いちばんやりやすい活動として出てくる。

「奉仕型」というのもタイプが二つあって、ボランティア型と、動員型とでもいいますか、町内会でみんなでドブさらいするとかいう種類の活動ですね。これは、どっちかというところ、「自己充実型」の活動に比べれば、あまり楽しくない、動員されてやるのじゃ、おもしろくない。これが不人気の一つの理由になっていると思うんですね。

「問題解決型」というのが、社会学者が一般に、そういうものが出てくることを期待しているという活動で、コミュニティ活動のいちばんの中核になるはずだと考えているわけですが、これは事実上非常にむずかしい。ある種の条件が幸運にそろわないと出てこない、というのが現状じゃないか。

ただし、それで文句をいっても始まらないので、「自己充実型」の活動をだんだんやっていくという過程で、アブルートされた都市化社会というものを一応前提としますと、自分と同じ関心をもっている人間が、ほかにいるはずだと思っても、どこに行ってもいいのかわからない。駅の前で旗を立てて待っているというわけにもいかない。とすれば、まず、テニスと一緒にやりましょう、というぐらいから始まって、やっていくうちに、テニスコートがなかなか借りられないが、これはどういうわけだとか、そういう形で、問題と結びついていくことが必要なんだろう。そういう意味で

は、現在のところ、われわれは、「ものたりない、ものたりない」といっているけれども、自己充実型の活動の、ある種の全盛期を迎えているわけで、越智先生がお調べになった五千幾つのうちの大部分が、それに大体相当するだろうと思うんですね。ですから、焦らなければポツポツいくのかなという感じが、一方でいたします。

地域混住型の日本、地域住み分け型の欧米

倉沢 もう1点、これは日下部先生に教えていただきたいことでもあるんですが、イギリスの社会は個人の自由な社会だ、好きなことをやっているのだというのは、基本的にはそのとおりなのですが、一例を挙げますと、郊外の住宅地なんかであれば、だれしも、家の前に、ネコの額ほどの同じ規格の庭があって、そこでバラづくりの競争をしているとか、バラづくりを怠っている人間がいると、電話がかかってきて、バラをまじめにつくれといわれる。日本人だったら、バラをつくらうがつかないまいが、おれの勝手じゃないかといいたくなるわけですね。ところが、彼らはそうやって、ある意味では日本人よりも集団主義的なことをやっている。なぜだろうと、いろいろ考えているのですが、たぶん、バラづくりがまじめに行われているりっぱな人格をもった人々の住んでいる通りだ、という評価が出てくる。彼らが、どこに住んでいるかが非常に大事だというのは、そこだと思うんですね。ですから、どこに住んでいるかということで、通りが評価されるから、通りの中に、まじめにバラをつくらないのがあると、皆が迷惑する。さっきおっしゃった、農業をやっていると、一人だけ勝手なことができないのと似たような状況が、そこで、偶然か意図的か別として、できている。これも、彼らのコミュニティ活動の一つの共通のベースになっているんじゃないか。私が興味をもったアメニティ・グループス（生活快適度増進グループ）というのは、大体そういうレベルで考えているものですから、ことにそう思うのですけれども、アメニティというのは、

個人ではどうしようもなく、ある種の共通の状況があったときに、はじめて意味をもってくる。そういうことから考えると、彼らはバラを一生懸命につくっている。日本人は、花をつくって通る人を喜ばせないのは、人格レベルが悪いからだという議論があるわけですが、たぶんそうではなくて、お互いにバラをつくったほうが、簡単にいえば、家を売って出ていこうというときに、高く売れるということもあるでしょうし、そういう通りに住んでいる人だから、りっぱな人だろうと評価してもらえる。といったような側面。さらにいえば、その通りでパーティが開かれて、そこに行けば、自分の娘や息子にふさわしい結婚相手も見つけられるとかいうことまで含めて、通りとか地域とかいうものも持っている非常に大きな意味を、彼らの社会はもっている。だから、そのコミュニティを大事にしようという気分をつくっている。われわれは、奥様とおかみさんが隣り合わせて住んでいるわけですね。その辺が少し違って、隣にどんなボロ家があっても、本人のプレステージには全然影響がない。そういう仕組みそのものに、問題があるのかな、ということを感じるわけですが、ここは日下部先生に教えていただきたいところです。

青井 かなり難問ですね。日下部先生、いまの問題だけではなくて、先生のご専門の立場から、社会福祉をはじめ、コミュニティを形成する場合の大きな主題になり得るものがあると思うんですが、そんなものも含めて何かおうかがいできればと思っております。それから、これを言い忘れたということがあれば、ご自由にお話しいただきたいのですが。

グッド・ネイバーの精神

日下部 倉沢先生のおっしゃったバラつくりの考え方、これはイギリスだけではなくて、ヨーロッパ、アメリカも全部含めて、窓というのは、自分の家のための窓であると同時に、通りから眺めた場合の景観も考えなければならないということを前提に、生活習慣の中でつくられているのじゃ

ないかと思います。とくにオランダなどに行くと、外から観賞するに足るようなじつに素敵なお窓があるし、町並みがあります。また——日本もだんだんそうなってきたようですが——建てかえるのだったら、歴史的に同じような形で作らなければならない。ベルギーでも、ブルージュなどでは昔のままの姿が残っている。それは、建てかえるのだったら12世紀とか13世紀と同じ形で作るように規制されているからなんです。そういうところでは日本よりも統制されているのではないかという、一つの矛盾みたいなものが出てくるのですが、それを解く一つのカギとして、コミュニティとプライバシーということに対する考え方の違いがあるだろうと思うんです。つまり、これはキリスト教にも関係すると思うんですが、グッド・ネイバー（よき隣人）という言葉があることとつながってくるのではないか。つまり、コミュニティというのは、自分だけが存在しているものじゃなくて、隣の人が存在することによって自分が存在し得るのだという前提があるんです。たとえばイギリスでいちばん大切だとされている、一人一人の“自立”（Independence）と“自由”ということとは、自分が自由である、自分がインディペンデントであることの前提は、コミュニティの構成員がすべて自由である。言葉をかえると、権利が侵されていない、プライバシーが侵されていない。そのことが前提で自分自身のプライバシーが保てるのだという考え方が、コミュニティのいちばん根本にあるような気がしたわけです。これは、私がボランティア活動を通して、イギリス人とともに暮らした経験の中から得た一つの結論みたいなものです。

小学校時代からコミュニティ・サービスの体験を

日下部 それから、これも強制的ではなくて自主的に学校がやるわけですが、ほとんどの学校がコミュニティ・サービスという科目をもっているわけです。私、最初に滞在したときなんかは、あるデー・センターで、中学生か、小学生の高学年みたいな子が、昼間、ご老人のためのデー・セン

ターにいるんですね。学校をさぼって来ているのかなとか思ったんですが、よく聞いてみると、学校から来ているわけで、コミュニティ・サービスなんですね。そういうことは、学校が容認し、もちろん親が認めている。日本だったら、昼間そんなところに行っては勉強がおくれて困る、と親が文句をいうかもしれませんけれども、幼いときから、自分自身がコミュニティの構成員の一人であるという自覚を、植えつけさせるということに、役立っているんじゃないかと思いました。

そういうふうな形で、理屈ではなく、体得しながら子供たちが大人になっていきますから、自分勝手にするということと、自由に選択するということの意味が違うのだということがわかっているんですね。日本の場合、自由というと、勝手気ままとイコールになるんですが、イギリスの場合の自由というときには、規制が働いている自由なんですね。日本で翻訳なさるときに、違った意味に翻訳なさったのじゃないかな、という感じがするんです。当時は、そういう発想がなかったのだと思います。

そういう点を考えますと、自分の住んでいるところをバラの花で美しくする、それを規制という形では受けとめていないのではないかということで、合点がいくと思うのですが。そのことが、たとえばロンドンのスカイライン——高い建物をつくらないようにして、景観を守ろうといったことにもつながってくる。「自由」イコール自分勝手というふうに解釈してしまると、合点がいかないことになるのじゃないかな、と私は思うのです。その辺のところの問題が、責任と義務ということとのつながりにも、関連してくるのじゃないかなと思います。

福祉サービスの場合にも立案・決定・実施への全面参加を

日下部 今日、日本で高齢化社会を迎えるに当たってのいろいろな問題がございまして、福祉サービスが行政だけで可能なかどうかということも、大きな論点の一つになっています。地域の中で一人一人がなんらかの

形で役割分担をするということが必要になってくるのじゃないか。イギリスの場合は、民間でいろいろなことをやって、なかなかいいなということになると行政が取り上げるという、日本とさかさまの形になっているんですね。日本はお上からずっと下へ流されてくる。町内会も、伝達という形でお上から流されてくる。そうなってくると、福祉サービスにしても、立案とか決定の場への参加が不可能で、実施の場だけに労力として狩り出されるというスタイルが起きあがってしまうのじゃないか。これからは、立案、決定、実施さらに問題処理の場においても、パーティシペーション（参加）が必要になってくるのじゃないか。それがなければ、とくに福祉の問題などでは、コミュニティを構成していくのは、むずかしいのじゃないかなという気がするんです。

日本では地域ボランティア活動に男性の参加が少ない

日下部 ボランティアの必要性がさかんに叫ばれていますが、男性が参加していないんですね。日本の社会的な仕組みが、仕事は男で、女は家事・育児だという形の延長線上に地域におけるボランティア活動も成り立っているわけですから、女性が地域のボランティア活動をほとんど担っているところが町内会の場合ですと、町内会長というのは男の方がほとんどなんですね。女の町内会長というのはあまり聞いたことがない。それは、いろいろな役職をもっている方が町内会長になられるわけですね。ところが、実際に活動するのは婦人部なんです。私はよく、町内会の婦人部の方からいろいろなご意見を聞く機会があるのですが、女性がいないれば町内会は成り立たないにもかかわらず、男の方はかっこういいところだけ取ってしまって、名誉職みたいなところに、ボンと乗っているだけだというわけです。いま地域の中で、老人介護の問題などは、まさに女だけがやっていることなのですが、家庭だけではどうしてもにない切れないのだという実感の中から出てきているボランティア活動は、まさに女性が主体なんで

すね。そのてっぺんに男の人を置く必要はないわけです。男の方たちは非常に理論的にはおっしゃるけれども、実践はともなっていない。これからのコミュニティは、生活者の感覚を基本にした形で形成されていかなければいけないのだし、実践ということが肝心なのだと思うのですが。

青井 どうも頭の痛いところですね。

町内会は警察と神社と地域ボスから手を切り、実利を伴う仕事をやれ

青井 加太先生、いかがでございましょうか。今後コミュニティをつくる場合、既存の歴史も踏まえまして、どうやったらいいのだろうかということですが。

加太 町内会は、実利を伴う仕事を一方でやる。その一方で警察の下請け——防犯協会もそうですが——みたいな仕事はやめてほしいんです。それから、神社の仕事もやめてほしいんです。お札売りとか寄付強要に来ますからね。また、選挙になると、急に地方議員とくっついて、町内会のボスが町内会を利用する。そういうことができないような規約を、各町内会でつくってもらいたいんですね。警察と神社、町のボス、これとの関係が切れないと、私なんか町内会に協力する気にはなれないのです。ただつきあっているだけです。

青井 実利を伴うというのは？

加太 それはほかでやっていますからね。町内会がもし企業社会の中で存在意義をもっていくのなら、地域ごとの実利を伴う仕事をおやりにならないと、将来、今のような町内会は消えていくんじゃないかと考えています。

女性も地域活動に進出しはじめたが……

青井 越智先生、いかがでしょう。

越智 いろいろとあるにはあるんですが……。日下部先生が、日本では

町内会の役員は男たちが占めているとおっしゃいますが、私の調査によれば、女性の役員も、少しずつ出てきております。

日下部 役員や副会長は女性でも、なぜか会長は男性なのですよ。

越智 トップの会長は少ないですが、副会長レベルは女性が非常に多いし、いちばん多いのは会計です。それに厚生、文化の方面は女性の方が多し。そういう意味で、意志決定を行う役員会では女性の比率がふえている。それはもちろん、町内会によって違いがあります。部会が少ないところもありますし、組織がきわめて小さいところもありますから、いちがいに申せませんが、わりと女性役員がふえてきているのは事実だろうと思います。それにつれて、会長にも女性が進出しはじめています。横浜では、連合町内会長も女性がやっているところがあります。その方は、もちろん単位の会長でもあるわけです。日下部先生のお言葉ですが、女性の多様な地域活動の厚みが、少しずつ、町内会の活動内容と役員構成を変えていく傾向が、見られると思うのですが。

ところで、町内に一つきりの組織としての町内会であるために、全国的にみると、やはり気になるケースがあります。いなかのほうの革新自治体というところに10年ほど前に講演に呼ばれたことがあります。市長が登壇いたしまして、「皆様は一国一城のあるじでいらっしゃいますから」といって、革新市長といわれる人が町内会長をもちあげるのです。私は完全に異質な話をするつもりですから、困ってしまいましたね。あとで名刺交換をすると、自治会長は議員さんです。これじゃ市長も、一国一城とかなんとかといって、最大の賛辞を並べざるを得ないでしょう。とにかく、町内会長が市議員に出ることが、加太先生がおっしゃる「実利」ということになるならば、困ったことでしょうね。

行政は勝手な線引きをするな。また町内会にも適正規模がある

越智 ただ、いままでのお話に出てこない点がございます。一つの町に

は一つの組織がある。これはそのとおりですが、じつは、その一つの町というものが、かなり都会になれば、行政のほうで勝手に「区画」と称する線を引っ張った、そういうのが一つの町となっているところが多くなってきております。そうでないと、広報を配布するとか、行政下請けをやるときに、行政のほうで、困る、というのです。あるいは学区を編成するのにたいへん困るといった、行政の専門的立場からの指導というのがありまして、非常に困ってしまう。また逆に、規模の問題でいいますと、社宅とか官舎とかいろいろありますが、その他の住宅の形成の仕方がありまして、わずかに10世帯やそらの大きさで一つの自治会と称している。これは、会社が違うのだから、あちらの社宅とこちらの社宅と近接していても、一つにはなれない。

これでは、自治会といっても何もできないわけです。適正規模というものがあるだろうと思います。倉沢先生が、社会的文化的な生活集団としての町内といわれるとき、伝統的にはそれなりの規模があったわけでしょう。現今の作爲的な都市の町内は、そういう社会的文化的町内を住民主体でどうつくり出せるか、という観点で、コミュニティという模索が行われていると考えます。そのためには、規模も、活動にふさわしく柔軟に調整されてよいのではないかと。とくに、ボランティアな活動が出来やすいように、連合とか校区とか、実状にあった形でとりくむことが必要なのではないか、と思います。

横浜でも、ある連合町内会範囲でボランティアな声が起こり、死にかかっている川をよみがえらせようということで、水系にかかわる町内会・連合会が、そのボランティアな活動を軸にしてとりくみ、いい成果をあげ、町内コミュニティを、新しくつくり出しているところがあります。ボランティア・アソシエーションは、そういう役割を果たすとき、町内会をコミュニティ的によみがえらせることができるでしょう。

コミュニティづくりの一事例

越智 もちろん、町内会の規模がかなり大きくて独自に創造的な活動がやれる場合もあるのは、当然です。私のところは1,200世帯ほどの町内会ですから、その条件は恵まれています。そこで私が町内会長をしていた過去の経験から、少しばかり補足させていただきたいのですが。

ある年、1年ほどかけて、「この町をどんな町にしたいか、そして自分には何が出来るか懇談会」という名称の小集会をくりかえし催しました。どんな小さなことでもよい、地域社会についての問題意識がもたれ、このことなら自分にもやれるということを見出し、自発的に実行してほしかったものです。すぐに効果が出るわけではありませんが、潜在的な支持者がたくさんいることがわかりました。そんななかから実ったのが、ボランティアな文庫活動や公園愛護活動です。こうしたボランティア・アソシエーションを生かす町内会のあり方が一般に求められていると思います。

もう1点、重要に思うことがあります。倉沢先生がおっしゃるように、都市行政がすすんで、元来、町内会が果たしていた機能が行政サービスに吸い上げられた結果、今日の町内会活動が魅力に乏しくなったといえますが、実は人びとの生活構造が変ってきて、行政もそのあり方を考え直す必要を感じはじめています。青少年問題でも、婦人問題、高齢化問題、地域福祉問題でも、また、町々の児童公園問題や地域緑化問題など、どれをとっても、住民の主体的な参加と町づくりに対応する、新しい自治体行政を模索せねばならなくなっている。こういう転換期だからこそ、新しい発想と自発主義により、地域文化変容の引き金になるボランティア・アソシエーションの役割と、それを受けとめることができるような、柔軟な町内会のあり方が期待されていると思います。

青井 結論というのはなかなか出るものじゃございませんけれども、既存の町内会だけではだめだ。また、単なるボランティア・アソシエーションをつくっただけでもだめだ。その二つの間を結びつけるような、新しい

アイディアと新しい計画みたいなものが、必要なんじゃないかといったような点が、大方の最終的なお考えじゃないかなと思っております。

長時間、活発なお話し合いをいただきましてありがとうございました。

(昭和61. 9. 30開催)

注1) アメリカの社会学者 T. Parsons は小は家族から大は国民社会に至るまで、あらゆる集団や社会はA, G, I, Lの4つの機能をみたまなければ存続できないと主張した。

A=Adaptation (環境適応)

G=Goal Attainment (目標達成)

I=Integration (内部統合)

L=Latency (価値維持)

国民社会の場合、Aは経済、Gは政治、Iは社会統制、Lは教育をさすと思えばわかりやすい。

注2) R.P. ドーア『都市の日本人』青井・塚本訳、岩波書店、1962年。(R.P. Dore, *City Life in Japan—A study of a Tokyo Ward*, Routledge & Kegan Paul, 1958 の訳で、ドーア教授が下宿していた戦争直後の台東区「池の端」のある町内での日本人の生活状態を調査した報告書)

注3) W. Beveridge, 1924年に「ベヴァリッジ報告」を作って、戦後イギリスの社会保障制度の基礎をつくった人。

注4) 地域社会研究所『東アジアの地域社会』『コミュニティ』No. 78, 1986年10月。

注5) up-root 住みなれた土地から追い立てをくうこと。根づいていた土地から離されて、根無し草的存在になること。

参 考 文 献

- R. P. ドーア『都市の日本人』青井和夫・塚本哲人訳、岩波書店、1962年
地域社会研究所『東アジアの家族問題』「コミュニティ」№76、1986年
地域社会研究所『東アジアの地域社会』「コミュニティ」№78、1986年
中川 剛『町内会——日本人の自治成立』中央公論社、1980年
中村八朗『都市コミュニティの社会学』有斐閣、1973年
奥田道大『都市コミュニティの理論』東大出版会、1983年
倉沢 進『都市社会学』東大出版会、1973年

ある町会役員の記録から

本稿は、東京都北区王子三丁目町会の役員として、長年地元のために尽くされた、故松本孝好氏（昭和61年11月28日没、享年86歳）の貴重な記録の一部を、関係者のご了解を得て、転載させていただいたものです。

（前 略）

関東大震災と昭和初期

大正12年9月1日午前11時58分、大地震が起った。午後にも時々余震があり、片づけも手につかず、夕刻になると下町方面（旧東京市内）の空は真赤になり、大火と判った。本所、深川を始め、三日三晩燃え続け、3日朝方、上野の山と不忍池近くで納まった。

私も本郷天神下と御徒町に親戚があって、3日お見舞に行ったが、両家共焼出されていた。上野御成道は、離ればなれになった家族や親戚等の名前を書いたプラカードや旗等を、かついで泣声を張り上げて捜し歩いている人で混雑していたのが今でも目に浮ぶ。

尚、焼跡の熱気で呼吸も苦しい位、何ととっても水が第一で、汚れ水でも飲みたい位であった。流言飛語が流れ、近所の方々と自警団を作り警備した。その内、軍隊が出動し戒厳令を布き治安に当った。

最近、東海地震が予告されその対策に当局もいろいろと準備を進めているが、町会に於ても防災組織をつくり、早急に善処する必要があると思う。さて、当町は大部分が水田で開発がおくれていたが、震災で家を焼かれたり、破壊されたり、或は道路改正等で移転される方々が住宅を建て初めたが、満足な道が無かった。そこで土地区画整理組合をつくり、現在、王子三、四丁目から東十条方面まで道路計画をたてて実施した。其の頃は自動

車の通行は僅かであったが、十字路、丁字路の角を角切にしてつくったので、今の時代に大変便利さを蒙っている。土地の割当が決まると、我も我もと埋立をして住宅が建てられ、昭和7年、王子町と岩淵町が合併して東京市王子区となった。その頃、宮江町は実に壱千世帯以上の大町会となり、隣接町会の世帯数も相当増え、水田の面影はなくなった。

小学校通学区域について

現在、当町会の50歳台の方々は、王子第一小学校、第四小学校又は王子小学校等卒業された方がいろいろですが、昭和8年4月、東十条に王子第四小学校が開校された。其の時、王子三、四丁目、尾長橋附近の子供達迄がその学校の区域にきめられた。3分か5分で通学出来る王子小学校があるのに子供の足では20分かかり、しかも其の頃は道が悪く雨でも降ると30分かかって衣服も泥だらけになるので、多くの父兄から苦情が持込まれた。そこで、代表数人で区長さんに面会を求めたが、紹介議員がいないからと断われた。数日の後、又伺ったら今度は面会をしてくれたので実情を話し、王子小学校に変更して下さいようお願いしたが、区長さん曰く、私が決めるのではなく、学務委員が決めるのだから自宅を訪問してお話しなさいといわれ、5名の住所氏名を教えてくれた。そこで数人で堀船、十条、赤羽などを訪問し、成可く早急にとお願いして歩いた。その翌年から2年程、自由地区にしてもらい、昭和11年から王子小学校の通学区域として今日に及んでいる。

行政地区改正

昭和13年、区役所から地区改正の通達があった。王子地区に属する旧町名は、主として柳町、檜溝町、榎町、宮江町、砂田町、豊住町、西町、本町等で、各世帯数も大きな差があった。前記町会を一部合同、或は分割等をして王子一丁目から五丁目迄道路其の他を以って境界とした。王子三丁目も、宮江町、豊住町、榎町、砂田町の一部が合同して、約730世帯で王子三丁目町会とし、同年10月1日に結成されたが、備品も事務所もなく、

いかにして運営していくのか当惑したが、幸に原口貞吉さん宅で役員会の会合に座敷を貸して下さった。今迄の各町会の運営の違いを旧町会代表の話合によって調整しながら、翌14年4月、風見正徳氏を町会長に推挙し、役員との協力を得て明るい町会の歩みをつくった。

切符制と配給制度

其の後、区役所内に町会係を置き、町会規約準則等をつくり、各町会へ隣組や防空群を組織し、事務所を置くよう指令された。

昭和15年6月、統制が強化され、生活必需品の殆んどが配給制度となり隣組を通じて切符で配給を受けるので、町会内居住者全員が隣組へ加入することとなった。切符の取扱の説明や防空訓練のこと、国債協力、其の他の議案等で役員、隣組長等100名以上の集会をすることとなり、幸に町会長の風見氏が剣道師範で、道場をお借りして集会を行っていた。其の頃から戦時色が強くなり、出征軍人の見送り、戦地へ送る慰問袋のお世話等、町会役員は実に多忙であった。

紀元2600年

昭和15年(1940)は紀元2600年に当る。今は西暦一本でいうが終戦前は紀元を使用していた。西暦と660年の差がある。

町会創立当時は無一物で、祭礼の御神酒所も空箱を並べて祭壇を作ったが、せめて紀元2600年の記念にと当町会内建具店の田上さんをお願いして、檜造りで祭壇3段を造って頂いて現在も使っているが、40年も使って少し破損したので前年田上さんに修理をしてもらい、新品同様になったので記念のものとして末永く使用して頂きたいと思う。尚、子供達や会員の皆さんと旗行列をして王子神社に参拝し、出征軍人の武運長久と国土安全を祈願したが、多数の犠牲者と本土空襲を受けたことは実に残念である。

防火用貯水槽

区当局の指示により、出来得る限り各町会毎に火災に備えて貯水槽を設置することとなり、当町会では幸に先代鈴木病院長の鈴木忠興先生が、病

院の敷地内に設置することをご承認下され、落成式には鈴木先生ご夫妻を始め、町会役員18名が記念の写真を写したが、他の地へ移られたり、境界されたりして今当町会には大熊重一氏と蛭原貞栄氏と私の3名しか残っていないが、貯水槽は完全に出来ていて、40年以上を経た今も尚非常用貯水槽として備えて頂いているので、故人になられた鈴木先生の功績に対して感謝しなくてはならない。

大東亜戦争

昭和16年、役員改選により池上虎弥氏が町会長に推薦され、役員会は会長宅で開催したが、隣組長の集会は午前中お風呂屋さん（高砂湯）をお借りして行った。

12月8日、宣戦布告となり国家総動員法が施行された。応召軍人も益々多くなり軍属徴用等、居住者の転出転入まで町会で取扱うこととなった。

昭和18年、役員改選で村田金太郎氏が町会長に就任した。

益々食料事情も悪くなり、田舎のある方は他県へ移転するようになった。尚、統制で個人商店は殆んど営業が出来なくなり、一精堂という菓子屋さんが疎開するので、町会でその家を借り受け事務所としたが、役員会程度で隣組長の集会はやはりお風呂屋さんを借りて行っていた。

住宅疎開と学童疎開

昭和18年の頃から防火改修の為、住宅の周囲を代用品の竹あみで、セメントを塗り初めたが、後引込線の沿線、貯炭場の周囲や王子小・中学校の前脇等、居住者に立退してもらい、家屋を取こわし、疎開を行うこととなった。町会の役員や隣組の方々が交代で跡片付をした。又、町内でも数ヶ所、間引疎開をすることとなり、町会の素人の手で取こわしたが、町会長の村田さんは倒れてきた材木で肩をいため鈴木病院へ入院して治療を受けた。

昭和19年8月、学童疎開をすることとなった。父兄の方々や町会の人達が荷造りを手伝い、疎開先は群馬県藤岡町の寺々であった。其の後、父兄

達と共に慰問に行った。尚、集団疎開をしたのは3年生以上で、当時6年生であった児童は翌20年3月6年の学業を終えて帰京したが、学校は荒れ果て、其の上B29の空襲は烈しく、卒業式が出来なかったが、29年を過ぎた昭和49年3月、王子小学校創立年記念式典の日に卒業式が行われた。

旧事務所譲受について

現在の場所は川久保さんの住居で、地主は十条の高木源右エ門さん。約80坪の借地であった。大正13年の建築で1階が38坪、2階が14坪計52坪で、その建物に貸家が2戸含まれていた。川久保さんはお米屋を営んでいたのど土間も広く座敷も6畳、8畳、回り廊下付であった。

昭和19年、家族全部が疎開するので町会へ譲って下さる話があった。町会も永年不自由をしてきたので是非ほしいと思ったが、お金が無いので王子信用金庫へ借用に往ったが第1回は断われた。そこで当時理事長の江口義一さんに頼もうと、村田さん、横田さん、私とでお願いしたら3人が借受人になれば借してくれるというので、借入をして譲り受け、事務も集会も出来るようになったが、空襲が益々烈しくなったので、心配でその都度防空指導員が詰めることとした。又、借入金については有志の方々の協力で返済することが出来た。

終戦と町会

昭和20年8月15日、終戦の詔書が發布された。昭和12年、日華事変以来強制的に引きまわされ、困苦欠乏に耐え、統制された配給食料の量は極めて少く、男も女も栄養を欠いた体に敢て防空、防火の訓練、防空壕掘等の重労働に耐えてきたが、今後どの様になるのかと心から憂慮した。配給品は一層窮屈になり、事務業務も忙しく続けているうち、昭和22年、王子区と滝野川区が合併して北区となり、各地区へ区の出張所をつくり、町会事務員の内、希望者は出張所の事務員に採用することとなり町会の事務は出張所へ移管になった。そして町会は解散し、町有財産は処分し、戦時中の執行部役員は遠慮という達しがあった。町会整備からさんさん奉仕奉仕で

酷使して置きながら余りの通達に怒りを持ったが、何しろ占領下であるから不満もいえないので柏木借三郎氏を整理委員長とし、会合を開いたが意見がいろいろで結論が出なかった。そこで事務所を青少年の補導育成の為に活用するという書類を提出した。然し、終戦後1つの美点は婦人参政権を認められたことである。江戸時代は土農工商と云って大きな差別待遇を受けて居り、明治になっても少しは変わったが、華族、士族、平民という制度であった。昭和21年、初めて男女平等の総選挙が行なわれた。

新青会と保安協会

早速、斉藤敏夫氏、市橋福太郎氏、山崎実氏、横田正恵氏他青年有志多数の協力を得て、新青会を結成し、斉藤氏が会長となり事務所備品等の管理を依頼した。ところが、今迄町会で維持してきた防犯灯の継続が困難となり、其の上毎晩のように停電があり、婦女や子供は夜は外出出来ない有様となった。そこで防犯、防火等治安の協力が必要となり、消防署では消防団をつくり警察では保安協会をつくらせて協力するよう要望された。当地では王子三、四丁目を以って第七地区会と称し、三丁目の林宗一郎氏が会長となり、翌年は四丁目の渡利千船氏が会長として過しているうち、各町会毎に支部を置くこととなり、支部長として白居幸吉氏、次に大野米太郎氏が就任した。子供の校外指導には、主として斉藤氏と私が当り、夏期ラジオ体操、少年野球其他の行事のお世話をいたした。

統制解除

昭和16年、生活必需品の殆んどが統制された。私事で恐縮ですが、当時の生活に関係が深い業種なので記載させていただきます。

私の所属の組合は、綜合食品統制組合といい、扱品目は加工水産物を始め、加工農産物、佃煮漬物類、砂糖、鶏卵等で、副食物の大半であった。配給区域は王子区（王子・赤羽）全部で、企業整備に依り僅か50名程で担当することとなった。4名位宛班をつくり、配給所へ詰め、3町会乃至4

町会を受持ち、町会へ連絡すると、隣組長さんは切符、容器、お金、印かん、メモ等を持って行列して配給品を受取り、組内で分けあった。吾々は配給が終り次第支部事務所に集まり、配給量、金額、何十町会、何千の隣組、何万人配給と集計し、十年近く続いたが大変な仕事であった。終戦後町会解散後は配給店を増し、個人店へ登録することとなり、私は業務分担で荷受主任から後、支部長に推薦された。其の間、除々に自由販売品が出来、昭和25年にはお米を除いて殆んど全商品が統制解除となった。

王子三丁目町会創立

防犯防火を始め、王子神社の祭礼、青少年対策、日赤奉仕団協力、冬期夜警、交通安全運動、環境衛生会員の親睦等町会の創立を望まれ、隣接各町も発足に向っていた。当町に於ても市橋福次氏、大野米太郎氏、林宗一郎氏から私に創立準備を進めるよう委員長に推薦されたので、町会規約の起草と有志の方々を訪問して協力を要請し、昭27和年5月、王子小学校講堂に於て発会式を行い、初代会長として市橋福次氏が就任した。現在の規約は其の後数回総会に諮り修正されたが、創立の時起草した大部分が活用されている。

会費は1世帯幾らと金額を示さなかったが、隣組内の話し合等自発的に醸出して頂いた。当時の決算を見て、現在の物価に比較して大きな協力であったことを感謝している。

(後 略)

(昭和56年10月発行、王子三丁目町会三十周年記念誌『わが町の歩み』から抜粋)

編 集 委 員

青井 和夫	天野 郁夫
並木 正吉	日笠 端
前田 和甫	松方 健
宮坂 忠夫	森村 道美
山口 喜一	湯沢 雍彦

頒 価 300円

地域社会研究所刊行物 No 116
コミュニティ 79 町 内 会

昭和62年2月10日 発 行

発 行 財団法人 地 域 社 会 研 究 所

〒 100 東京都千代田区有楽町1-13-1
第一生命館

電 話 03 (216) 1 2 1 1 (大代表)

振 替 東京 4-137404

取 扱 株式会社 国 勢 社

〒 141 東京都品川区西五反田2-19-3
五反田第一生命ビル

電 話 03 (492) 5 8 7 8 振替 東京 2-376

印 刷 大日本印刷株式会社

落丁・乱丁があればおとりかえします

地域社会研究所について

この財団法人は、近代のかつ民主的な地域社会（コミュニティ）の発展に寄与する目的で、第一生命保険相互会社が剰余金の一部をさいて基金を提供して、昭和38年10月10日に設立されました。

その事業としては、

1. 近代的市民意識で裏づけられた地域社会観念の確立についての調査研究
2. 近代的地域社会観念の啓発と普及
3. 近代的地域社会を形成する各分野の調査研究
4. 前記の諸事業についての実験と指導
5. 地域社会についての書籍、パンフレットの刊行

などを行います。

これらは、いずれも人間生活の全般にわたる大きな問題で、たいへんむずかしい問題でありますので、研究所の組織は、広く各分野にわたる権威者の方々をもって構成されております。

今後事業の成果により、わが国の地域社会における産業、文化、教育、福祉厚生、建設、自治などの面の諸問題がしだいに解明され、いささかなりとも、新しい日本の社会の実現と発展に役立つことを念願する次第であります。

なお、この研究所の役員は、つぎのとおりであります。

(五十音順・敬称略)

顧問

矢野 一郎 第一生命相談役

理事長

西尾 信一 第一生命取締役社長

常務理事

松方 健 第一生命元部長

理 事

青井 和夫 津田塾大学教授
磯村 英一 文学博士・東京都立大学名誉教授
白石 清 元常務理事
高山 英華 工学博士・東京大学名誉教授
並木 正吉 食料・農業政策研究センター理事長
日笠 端 工学博士・東京理科大学教授
福武 直 文学博士・東京大学名誉教授
宮坂 忠夫 医学博士・女子栄養大学教授
矢田 恒久 第一生命相談役
湯沢 雍彦 お茶の水女子大学教授

監 事

村勢楠太郎 第一生命専務取締役
山口 正義 医学博士・結核予防会理事長

評議員

田辺 定義 前東京市政調査会顧問
塚本 亮一 第一生命取締役会長
内藤寿七郎 医学博士・愛育病院名誉院長
中根 千枝 東京大学教授
前田 和甫 医学博士・東京大学教授
森村 道美 東京大学助教授

出版案内

購読ご希望のかたは、誌代を直接郵便振替（東京4-137404番、財団法人地域社会研究所）でご送金ください。また、継続して購読されるかたは1年分をまとめてご送金されるとご便利です。（送料実費）

コミュニティ

A5判 頒価 300円

既刊

- 第1号 コミュニティのあり方
 第2号 新しい農村生活
 第3号 地域社会と婦人
 第4号 都市生活とコミュニティ
 第5号 家庭のしつけとコミュニティ
 第6号 老人問題とコミュニティ
 第7号 コミュニティと青少年
 第8号 日本人のつきあい
 第9号 家族と親族
 第10号 健全な子どもの育成
 第11号 今日の教育を考える
 第12号 レクリエーションとスポーツ
 第13号 健康なまち
 第14号 交通安全とコミュニティ
 第15号 日本人のことばと話し方
 第16号 テレビと家庭生活
 第17号 家庭婦人の学習
 第18号 公共の場におけるマナー
 第19号 精神衛生
 第20号 ヨーロッパを考える
 第21号 公衆衛生
 第22号 千代田地区保健活動10年の
 総括
 第23号 創造的農業者
 第24号 団地生活を考える

- 第25号 食生活を考える
 第26号 日本人の暮しと住まい
 第27号 地方都市とコミュニティ
 第28号 わがコミュニティ
 第29号 家族はこれからどうなるか
 第30号 自然と人間
 第31号 子どもの遊び場
 第32号 コミュニティと広場
 第33号 乗物と人間
 第34号 ことわざとコミュニティ
 第35号 主婦と生活時間
 第36号 おやじの座を語る
 第37号 社会と健康
 第38号 災害とコミュニティ
 第39号 日本の青年
 第40号 コミュニティ——10年
 第41号 民話とコミュニティ
 第42号 余暇とコミュニティ
 第43号 CATVとコミュニティ
 第44号 ゴミを語る
 第45号 社会福祉の国際比較
 第46号 親族問題の諸相
 第47号 わがまち——その財政
 第48号 保健・福祉とコミュニティ・
 オーガニゼーション
 第49号 企業とコミュニティ

- | | | | |
|------|---------------------|------|--------------|
| 第50号 | 人間の居住環境と
コミュニティ | 第65号 | 新しい地域保健をめざして |
| 第51号 | 身のまわりの安全 | 第66号 | 夫の役割・妻の役割 |
| 第52号 | 山村女性の生活変動 | 第67号 | 健康と食生活 |
| 第53号 | 近所づきあいのコツ | 第68号 | 子どもと教育 |
| 第54号 | 手づくりの地域文化 | 第69号 | ことばと社会 |
| 第55号 | 各国家族の新しい動き | 第70号 | 商店街 |
| 第56号 | コミュニティと土地利用 | 第71号 | ある漁村社会の移りかわり |
| 第57号 | 川とコミュニティ | 第72号 | 集合住宅 |
| 第58号 | 日本の高校生・
アメリカの高校生 | 第73号 | 住みよい暮らし |
| 第59号 | まちづくりの実験 | 第74号 | 住区と施設 |
| 第60号 | 主婦と職業 | 第75号 | 昔の主婦と今の主婦 |
| 第61号 | コミュニティ・センターの
評価 | 第76号 | 東アジアの家族問題 |
| 第62号 | 食料問題と農業のゆくえ | 第77号 | 少年非行 |
| 第63号 | コミュニティと生涯教育 | 第78号 | 東アジアの地域社会 |
| 第64号 | コミュニティと生活道路 | 第79号 | 町内会（新刊） |

高年齢を生きる

A5判 頒価 300円

- | | | | |
|------|---------------|------|---------------|
| 既刊 | | 第13号 | 年金 |
| 第1号 | 高年齢人口の問題点 | 第14号 | 兼業農家のお年寄りたち |
| 第2号 | 高年齢者と家族 | 第15号 | 働く力——高齢者 |
| 第3号 | 定年（品切れ） | 第16号 | 高齢者問題にどう答えるか？ |
| 第4号 | 高齢者の生活記録より | 第17号 | 農村高齢者の移りかわり |
| 第5号 | オーストリアの高齢者と家族 | 第18号 | 高齢者のための住宅 |
| 第6号 | 高齢と体力 | 第19号 | 高齢とレジャー |
| 第7号 | お茶の水出の50年 | 別冊2 | 世界の人口像 |
| 第8号 | のぞまれる高齢者の学習 | 第20号 | ほげないための暮らしと工夫 |
| 第9号 | 楽寿の哲学 | 第21号 | 高年齢者と食事 |
| 別冊 | 各国人口の高齢化 | 第22号 | 年金—その新しい仕組み— |
| 第10号 | 思い出は遠くまた近く | 第23号 | 現代老親扶養論（新刊） |
| 第11号 | 同居の知恵・別居の知恵 | | |
| 第12号 | 寿命世界一をめぐる | | |

コミュニティ叢書

№1 会社従業員の生活と意識

——第一生命従業員調査——

編著者・青井和夫（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A4判・184頁・頒布価格 850円

○近郊農業地帯（神奈川県足柄上郡大井町）に社屋移転に際し第一生命の従業員全員と配偶者を対象に生活構造・態度・意識・希望等をまとめたもので、研究者はもちろん、地方進出を企図する企業および受け入れ側にとっての資料。調査集計表多数集録。

№2 大井町一地域社会の構造と展開

編著者・福武 直（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B5判・720頁・頒布価格2,500円

○第一生命の理想的なまちづくりの構想による移転とともに急速に都市化が進みつつある同地域における経済・社会・政治などの姿を把握分析したもので、今日各方面の関心事となっている農村の都市化地域開発計画などの参考資料。

№3 都市生活者の生活圏行動

——第一生命従業員調査——

編著者・高山英華（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A4判・188頁・頒布価格1,600円

○第一生命の従業員とその家族を対象に4回にわたる生活行動調査の結果をまとめた、いわゆる東京のホワイトカラー族世帯の行動パターンを示したもので、大都市や近郊地域における施策に対する参考資料。既刊№1の姉妹編として刊行。職員行動地図および調査集計表多数集録。

No. 4 大井町開発基本計画

編著者・日笠 端（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A 4判・128頁・頒布価格2,000円

○最近とみに市街化が進んでいる神奈川県大井町を対象に、コミュニティ・プランニングの考え方をいかに都市計画のなかに織り込むかという課題を研究してまとめたもの。農村から都市へ脱皮しようとする地域における施策に対する参考資料。図・表多数集録。

No. 5 恒心会員の歩み

——岡山県の創造的農業者——

編著者・並木正吉（農林省農業総合研究所計画部長）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／B 5判・220頁・頒布価格1,500円

○かつて表彰をうけた岡山県下の優秀な若き農業者たちのその後十数年にわたる経営の変化のかずかずや地域に対する活動を詳しく追跡し、その業績を広い視野にたって評価したもの。類書がまねのみならず、困難な転機にたつわが国の農民・農村・農業の将来に対する資料として薦める。

No. 6 農漁村社会の展開構造

——秋田県由利郡金浦町——

（品切れ）

編著者・福武 直（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5判・380頁・頒布価格2,800円

○東北の日本海沿いの農漁村金浦町を対象に、産業経済・社会・政治の諸構造をはじめ生活改善・教育など広範にわたり、歴史的過程から現状の問題点にふれ、それらを明らかにし、学問研究の上で大きく寄与するのみならず、こんにち揺れうごく農漁村のありかたに対しても示唆となる参考資料。

No. 7 地域社会の形成と教育の問題

——神奈川県大井町——

編著者・松原治郎（東京大学助教授）／小野 浩（武蔵大学講師）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B 5判・267頁・頒布価格2,400円

○既刊No. 2で調査分析した神奈川県大井町のその後の社会機構の変化、とくに新しいコミュニティの動向のなかで、教育の問題のもつ意味と展開過程を実態調査に基づいてまとめたもの。実践的な施設にとって大いに役立つのみならず地域社会の教育問題に関する学問研究上の意義も大きい。

No.8 農山村社会と地域開発

——神奈川県大井町相和地区——

編者・福武 直（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B5判・410頁・頒布価格4,500円

○第一生命の進出や東名高速道路の貫通などによって都市化していく神奈川県大井町において、農業地帯としての相和地区が、農業の将来への不安のなかで、どのように展開したかを述べたもので、高度成長過程における開発と農業の矛盾を示す事例を分析したもとのしてその価値は高い。

No.9 企業進出と地域社会

——第一生命本社移転後の大井町の展開——

編者・福武 直（東京大学教授）蓮見音彦（東京学芸大学助教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B5判・563頁・頒布価格6,400円

○第一生命が大井町に移転してから10年、第一生命の進出と併せ、この間の社会、経済状況が大井町の地域社会にどのような影響と変動をもたらしたか、また研究所が意図した理想的な田園業務都市の建設の構想はどのように具現されたか、専門学者による大井町調査研究の最終報告で叢書No.2の続編として地域社会発展考察上の参考資料。

No.10 健康農村活動と地域社会

——羽生市千代田地区——

編著者・青井和夫（津田塾大学教授）宮坂忠夫（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B5判・353頁・頒布価格7,000円

○昭和31年から10年間継続した埼玉県千代田地区健康農村活動について、対照地区をとるといふ実験計画をとりその影響を検出した。しかし、その後の農村の急速な変化に着目し、活動終了後の再調査を行った。その両地区は兼業化と都市化の影響の下に類似した性格をもっているが、地域活動や地域連帯性には差違がみられる。国際的にも評価された健康農村活動期間ならびにその後の10数年間の追跡調査についての報告である。

No.11 学習社会の成立と教育の再編

——長野県上田市——

編著者・松原治郎（東京大学教授）久富善之（埼玉大学助教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B5判・510頁・頒布価格8,000円

○生涯教育が叫ばれる日本の教育状況の中で、地域社会がもつ教育力を再発見するとともに、学校教育を始め各種の教育の社会化を深め教育の地域社会性を高めるにはどうすべきか、本書は上田市の教育総合調査をもとに教育を中心としたコミュニティ形成の可能性を探る。

